

レッドリストあいち 2025 新規掲載種の解説

(1) 維管束植物

2025 年版レッドリストに掲載された植物のうち、新たにリストに掲載された種、および 2020 年版では絶滅とされたが今回評価が変更された種について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種および愛知県ではリスト外または評価対象外となったが環境省のレッドリストに掲載されている種についても、絶滅種・絶滅危惧種とほぼ同じ様式で記述した。

記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。

【掲載種の解説（維管束植物）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の分類上の位置を示す門、綱、科名等を各頁左上に記述した。科の範囲、名称、配列は、科内の種の配列と共に、レッドリストに従った。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「環境省レッドリスト 2020」の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。

【評価理由】

対象種の愛知県における絶滅のおそれの程度を評価した理由について記述した。評価の基礎になった個体数、集団数、生育環境、人為圧、固有性の階級値とその合計値も示した。

「国リスト」の種については【除外理由】として、対象種が愛知県では絶滅危惧種と判断されなかった理由を記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。この部分の記述は、特に断っていない限り全国的な資料に基づくものである。

【分布の概要】

対象種の分布状況について、県内・国内・世界での概要を記述した。県内の分布は、1985 年以後に生育が確認された区画（表 1、2 参照）を略称で示し、区画毎に代表的な標本を 1 点引用した。引用標本は愛知みどりの会標本室に収蔵されているものを優先し、また原則として採集年月日の新しいものを優先したが、標本の状態等を考慮してこの原則によらなかった場合もある。引用は採集者氏名（ただし小林元男氏と芹沢は名を省略）、標本番号、採集年月日、標本の所在（ただし愛知みどりの会は表示省略）にとどめたが、その区画内の既知産地で絶滅が確認されたものについては採集地（市町村名はラベルに表記されているもの）を加えた。また、必要に応じて 1985 年以前に採集された標本はあるがその後生育が確認されていない区画、記録はあるが裏付けとなる標本が確認できない区画を付記した。詳細な分布情報を公表すべきでない判断されたサルメンエビネとヒナチドリについては、県内を尾張、西三河、東三河の 3 地域に分けて記述した。

標本の所在は、以下の略号で示した。

- 無表示 : 愛知みどりの会 (AICH)
- CBM : 千葉県立中央博物館
- HNSM : 新城市立鳳来寺自然科学博物館
- KYO : 京都大学総合博物館
- NBC : 名古屋市立なごや生物多様性センター
- TNS : 国立科学博物館

千葉県立中央博物館については、収蔵されている故井波一雄氏採集の標本はほとんど標本番号がないので、同館の維管束植物標本登録番号を併記した。

県内分布図は図示せず、そのかわりに、絶滅種については過去に分布していた区画に対応するすべてのメッシュ(標準地域メッシュ・システムにおける5倍メッシュ)、それ以外の種については1985年以後に分布が確認されている区画地域(その後の調査で絶滅が確認されている区画を含む)に対応するすべてのメッシュを「要配慮地区図」として表示した。今回現行市町村に分けて枝番を付した区画については、枝番区画ごとの調査が不十分であるため、枝番を付さない区画単位で表示した。詳細な分布情報を示していない種については、尾張、西三河、東三河の3地域に対応する全てのメッシュを淡色で図示した。

【生育地の環境／生態的特性】

対象種の生育環境及び生態的特性について記述した。また、横に地形、縦におよその水条件(草・岩は草地・岩崖地等の略)をとった区分図に、主要な生育範囲を示した。岩崖地等の樹林を構成する種は森林、草・岩双方をマークし、湿地林の構成種は湿地のみをマークした。

【現在の生育状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生育状況、減少の要因等について記述した。

絶滅種については【過去の生育状況／絶滅の要因】として、対象種の愛知県における過去の生育状況、絶滅の主な要因についてわかる範囲で記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

異名、近似種との識別点、和名の語源等、以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に示した。

【関連文献】

対象種の理解の助けになる一般的文献を、著者、発行年、表題、掲載頁、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

多くの種に関連する文献については、以下の略号を用いた。

保草本Ⅰ：北村四郎ほか, 1957. 原色日本植物図鑑 草本編Ⅰ. 保育社, 大阪.

保草本Ⅱ：北村四郎ほか, 1961. 原色日本植物図鑑 草本編Ⅱ. 保育社, 大阪.

保草本Ⅲ：北村四郎ほか, 1964. 原色日本植物図鑑 草本編Ⅲ. 保育社, 大阪.

保木本Ⅰ：北村四郎ほか, 1971. 原色日本植物図鑑 木本編Ⅰ. 保育社, 大阪.

平シダ：岩槻邦男, 1992. 日本の野生植物 シダ. 平凡社, 東京.

学シダⅠ：海老原淳, 2016. 日本シダ植物標準図鑑Ⅰ. 学研, 東京.

学シダⅡ：海老原淳, 2017. 日本シダ植物標準図鑑Ⅱ. 学研, 東京.

平木本Ⅰ：佐竹義輔ほか, 1989. 日本の野生植物 木本Ⅰ. 平凡社, 東京.

平新版1：大橋広好ほか(編), 2015. 改訂新版 日本の野生植物1. 平凡社, 東京.

平新版2：大橋広好ほか(編), 2016. 改訂新版 日本の野生植物2. 平凡社, 東京.

平新版3：大橋広好ほか(編), 2016. 改訂新版 日本の野生植物3. 平凡社, 東京.

平新版4：大橋広好ほか(編), 2017. 改訂新版 日本の野生植物4. 平凡社, 東京.

平新版5：大橋広好ほか(編), 2017. 改訂新版 日本の野生植物5. 平凡社, 東京.

環境省：環境省(編), 2015. レッドデータブック 2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー8 植物Ⅰ(維管束植物). 株式会社ぎょうせい, 東京.

SOS旧版：愛知県植物誌調査会, 1996. 植物からのSOSー愛知県の絶滅危惧植物. 同会, 刈谷.

SOS新版：愛知県自然史研究連絡会, 2002. 自然からのSOSーレッドデータブックあいち・植物編解説. 愛知みどりの会, 刈谷.

表 1 調査区画一覧

地域	番号	略称	範囲
東 			

(次頁に続く)

表 2 調査区画一覧（前頁の続き）

地域	番号	略称	範囲
尾張	48	春日井	春日井市
	49a	岩倉	岩倉市
	49b	豊山	豊山町
	49c	北名古屋	北名古屋市
	49d	清須	清須市
	50	名古屋北部	名古屋市西区、北区、中区、東区、守山区、千種区、名東区
	51	名古屋南東部	名古屋市昭和区、瑞穂区、南区、天白区、緑区
	52	名古屋南西部	名古屋市中村区、熱田区、中川区、港区
	53	一宮東部	一宮市（奥町を除く旧市域）
	54	一宮西部	一宮市（奥町、旧木曽川町、旧尾西市）
	55	稲沢	稲沢市
	56a	あま	あま市
	56b	大治	大治町
	57a	津島	津島市
張	57b	愛西	愛西市
	58a	蟹江	蟹江町
	58b	弥富	弥富市
	58c	飛島	飛島村

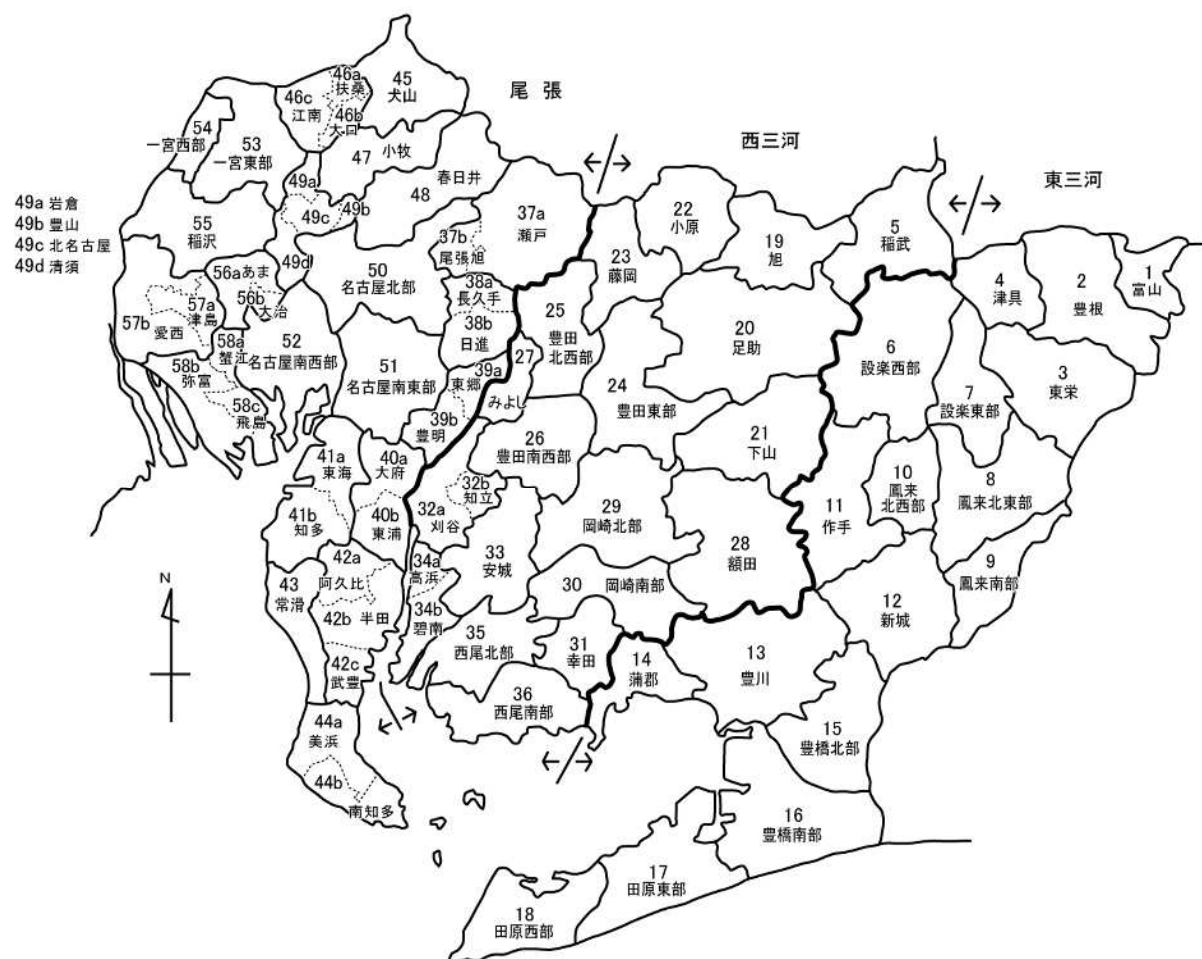


図 1 調査区画図

ナツノシライトソウ (仮称) *Chionographis* sp.

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 2、人為圧階級 3、固有性階級 4、総点 17。極めて特異な開花期と形態的特徴を持つシライトソウ属の 1 種だが、生育地も個体数も極めて少ない。

【形態】

多年生草本。地下茎は短く斜上する。葉は束生し、長さ 3～5cm の柄があり、葉身は楕円形、長さ 3.5～4.5cm、幅 2～2.3cm、先端は鈍頭である。花茎は高さ約 12cm、茎葉は上半部に多く、斜上し、広披針形で長さ 1cm 程度、幅 2～3mm。花期は 8 月中旬から 9 月上旬、穂状花序は花時に長さ 1cm 程度、10 個内外の花を密につける。伸長する花被片は倒披針形、長さ 4～5mm、先端の幅 0.5～0.8mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：8 鳳来北東部 (芹沢 104253, 2024-8-21)。

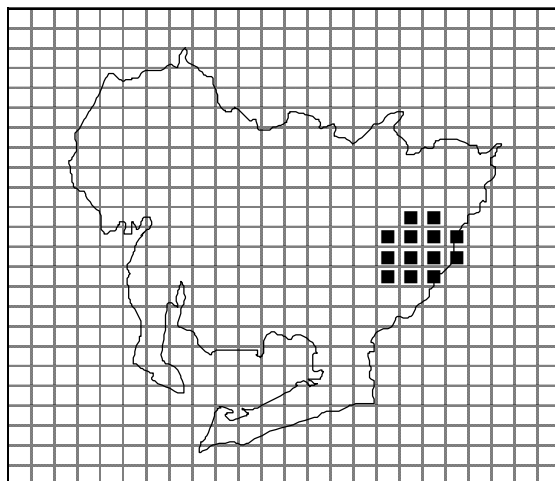
【国内の分布】

おそらく愛知県固有種。

【世界の分布】

おそらく日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

低山地の林縁の崖下にある棚状の場所に生育している。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

比較的目につきやすい場所に 2 株が隣接して生育していたが、何かの拍子に採取されてしまう恐れがあったので、うち 1 株は標本にした。周辺には春咲きの普通のシライトソウも生育していた。

【保全上の留意点】

2 株しかないというのは何とも不自然で、近くにまとまった群落があると思われるが、地形が急峻でまだ発見できない。何はともあれ、母集団を探索する必要がある。

【特記事項】

開花期も花序や茎葉の形態も他のシライトソウ類とは著しく異なっており、おそらくは新種として記載すべきものと思われる。ただし 2 株しか確認されていないので、上記の形態的特徴が小さい株にすぎないのか、充分発育したものなのかもはっきりしない。発見者の浅井むつ江氏によれば、「2017 年 8 月頃、花散策に出かけた時白い小さい花を見つけた。2020 年にも同じ花を咲かせた。発見してから 7 年になるが 2 本の開花はそのまま、植物体の大きさも変化がない」そうである。

【関連文献】

ここで初めて記録する植物で、関連文献はない。

(執筆者 芹沢俊介)

ヒナラン *Amitostigma gracile* (Blume) Schltr.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 4、固有性階級 2、総点 16。全国的に減少傾向の著しいラン科植物で、愛知県では過去に採集された標本があるのみであったが、現存が確認された。

【形態】

多年生草本。紡錘状に肥厚した根がある。茎は斜上して上部は立ち、高さ 5～15cm になる。葉は茎の基部近くに 1 個つき、長楕円形～広披針形、長さ 3～8cm、幅 1～2cm、先端は鈍～鋭頭、辺縁は全縁、基部はやや茎を抱く。花期は 6～7 月、花は茎の上部に一方に偏って 10～15 個つき、短い柄があり、淡紫色、苞は卵形、長さ 3～5mm である。背がく片は楕円形、側がく片は斜卵形、側花弁は斜広卵形で、いずれも長さ 2.2～2.5mm、先端は鈍頭、唇弁はくさび形卵形、長さ 3.5mm、ほぼ中央で 3 裂し、中央裂片は幅約 1.2mm、先端は円頭、側裂片は長さ約 1mm、距は筒状で細く、長さ 1～1.5mm である。果実はさく果で楕円形、長さ 5～7mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：10 鳳来北西部（芹沢 104068, 2024-6-11）。7 設楽東部にもわずかに生育しているらしい。東：12 新城（加藤等次 s.n., 1963-9-8）、西：19 旭（大原準之助 s.n., 1966-6-5）、25 豊田北西部（岡本英一 280, 1958-5-19）で採集された標本もある。

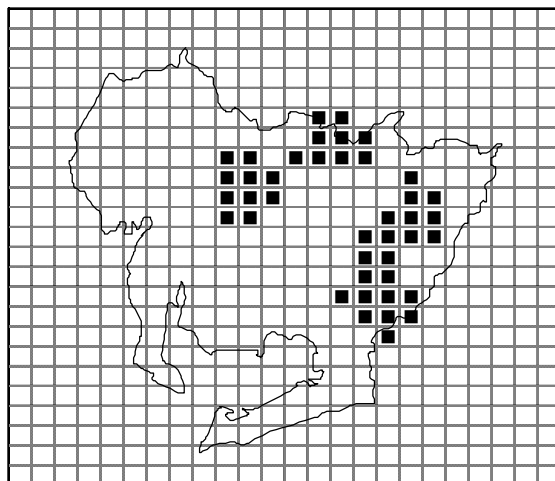
【国内の分布】

本州（茨城県北部および愛知県以西）、四国、九州。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の林内の岩上に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

道路近くの岩壁に 30～40 株程度の群落がある。以前は周辺にも点在していたようだが、2024 年の調査では見当たらなかった。一方で道路等の拡幅による生育地の破壊、他方で園芸目的の採取が、減少の主要因と思われる。

【保全上の留意点】

イワチドリやウチョウランに比べれば花の小さい植物であるが、それでも園芸目的の採取を防止するため、分布情報の公表に際し慎重な配慮が必要である。

【関連文献】

保草本Ⅲp.12, 平新版 1 p.182, 環境省 p.341, SOS 旧版 p.109.

（執筆者 芹沢俊介）

サルメンエビネ *Calanthe tricatinata* Lindl.

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 4、固有性階級 2、総点 17。全国的に採取圧が高く減少傾向の著しいラン科植物で、愛知県では以前から生育しているという話を聞いていたが、最近になって確実な資料が得られた。

【形態】

多年生草本。根茎は球状で、過年度のものを含め数個が連なる。葉は 3~4 枚束生し、倒卵状長楕円形、長さ 25~35cm、幅 6~10cm、基部は次第に狭くなり、先端はやや急に狭くなって頂端は短く尖る。花期は 5 月、花茎は高さ 30~50cm で、上部に 6~12 花をつける。がく片は長さ 18~20mm、緑色、側花弁はやや小さく同色、唇弁は紫褐色から赤褐色で、中裂片の中央に 3 条のとさか状突起がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

西：(村松 32447, 2021-5-26)。区画は公表しない。

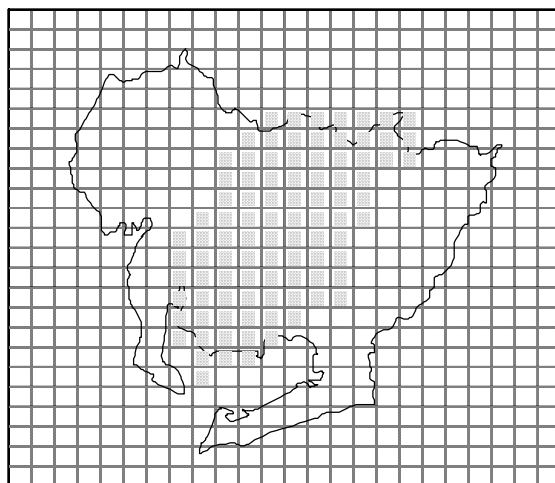
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、台湾、中国大陸、ヒマラヤ。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

温帯の落葉樹林下に生育することが多いが、愛知県の自生地は暖帯域の沢から 5~6m 離れた明るい二次林内であるという。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

個体数は少なく、3~4 株であったという。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全することはもちろん必要だが、本種の場合はそれ以上に、園芸目的の採取を防止する必要がある。

【特記事項】

エビネやナツエビネに比べ、葉の先端がやや急に狭くなる。東：3 東栄 (芹沢 87415, 2011-9-24) にも本種らしいものがあるが、まだ開花しそうもないやや小さい株で、断定できない。

【関連文献】

保草本Ⅲp.54, 平新版 1 p.188.

(執筆者 芹沢俊介)

ムカゴソウ *Herminium lanceum* (Thunb.) Vuijk

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 3、固有性階級 2、総点 16。湿った草地に生育するラン科植物で、県内では過去に採集された標本があるのみであったが、2020 年に 1 株の現存が確認された。

【形態】

多年生草本。楕円形の球茎がある。茎は直立し、高さ 20～45cm になる。葉は茎の下部につき、葉身は線形、長さ 8～20cm、幅 5～10mm、先端は尖り、基部は茎を抱いて葉鞘となる。花期は 7～8 月、花は茎の上部に多数穂状につき、淡緑色、苞は卵状三角形である。がく片は長楕円形、長さ 2～2.5mm、側花弁は線状披針形でがく片よりやや短い。唇弁は長さ 6～8mm、中部まで 3 裂し、側裂片は線形で長い、中裂片はごく短い。距はない。

【分布の概要】

【県内の分布】

西：21 下山 (芹沢 96226, 2020-7-21)。東：稲橋ヨリ田口ノ間 (おそらく 6 設楽西部、伊藤篤太郎 s.n., 1891-10-23, TNS)、9 鳳来南部 (黄柳野、井波一雄 s.n., 1943-9-26, CBM264614)、13 豊川 (御津村, S.Murata 1953, 1928-7-6, TNS)、西：31 幸田 (三ヶ根山、井波一雄 s.n., 1953-7-23, CBM70487) で採集された標本もある。大原 (1971) は産地として 4 津具、14 蒲郡をあげている。

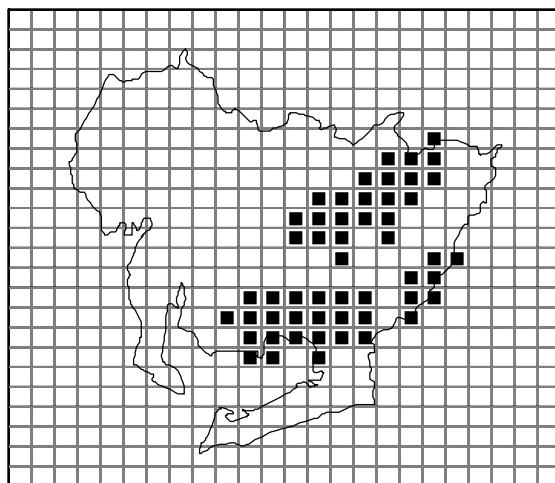
【国内の分布】

北海道 (西南部)、本州、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本、台湾、朝鮮半島、中国大陸東北部。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

通常は湿った草地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

谷戸田に沿った草地のややくぼんだ場所に、1 株だけ生育していた。

【保全上の留意点】

生育している草地の保全が必要である。

【特記事項】

1 株しかなかったため、株の上部のみを標本にした。そのため上に引用した下山の標本はやや不完全である。

【引用文献】

大原準之助, 1971. 愛知県国有林の植物誌 p.151. 名古屋営林局, 名古屋.

【関連文献】

保草本Ⅲp17, 平新版 1 p.208.

(執筆者 芹沢俊介)

ヒナチドリ *Ponerorchis chidori* (Makino) Ohwi

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 3、地域固有性階級 2、総点 15。2020 年版ではウチョウランの項に「設楽町段戸山と稲武町井山にあると報告されているが確実な標本資料がない」と付記した種類であるが、現存が確認された。総点は 15 であるが、採取圧が極度に高いことを考慮し、絶滅危惧 IA 類と評価する。

【形態】

多年生草本。根は柱状に肥厚する。茎は斜上し、高さ 7~10cm になる。葉は茎の中部に 1 個つき、葉身は長卵形、愛知県のは長さ 4cm、幅 1.8cm 程度、先端は鋭頭、基部は茎を抱く。幼株の葉は線形である。花期は 7 月、花は茎の上部に 3~4 個つき、紅紫色、苞は披針形で最下のものは長さ 1.5cm 程度あるが上方のものは小さくなり、花柄は長さ 8~12mm、がく片と側花弁は長さ 4~5mm、唇弁はそれよりやや大きく深く 3 裂し、距は後方に伸びて長さ 12~15mm、先端はわずかに湾曲する。

【分布の概要】

【県内の分布】

西：(芹沢 104121, 2024-7-9)。区画は公表しない。

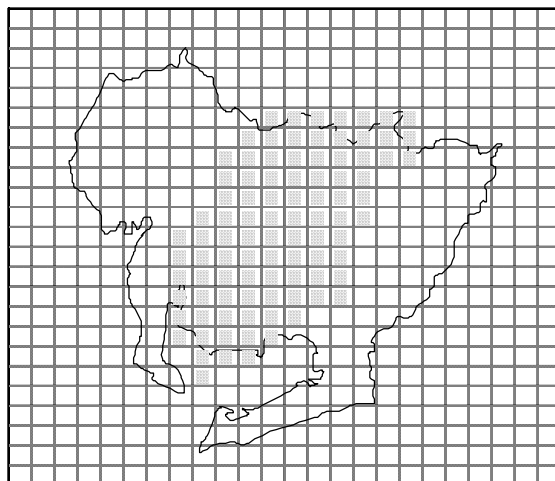
【国内の分布】

本州、四国。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

温帯落葉樹林の樹幹に着生する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

林内の 2 つの倒木上に少数株が生育していた。このままではいつ消失してもおかしくない状況だが、他に生木に着生している場所があるという話なので、個体数階級は 3 として評価した。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全することはもちろん必要だが、本種の場合はそれ以上に、園芸目的の採取を防止する必要がある。

【特記事項】

設楽町段戸山と稲武町井山の報告は大原 (1971) によるものである。

【引用文献】

大原準之助, 1971. 愛知県国有林の植物誌 p.152. 名古屋営林局, 名古屋.

【関連文献】

保草本Ⅲp.12, 平新版 1 p.226.

(執筆者 芹沢俊介)

ヒメキカシグサ *Rotala elatinomorpha* Makino

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 4、人為圧階級 2、固有性階級 3、総点 16。全国的に極めて稀少な小型の 1 年生草本で、愛知県では最近 1 か所での生育が確認された。

【形態】

1 年生草本。茎は地表を這い、枝は斜上～直立して高さ 3～6cm になる。葉は対生し、葉柄はなく、葉身は倒卵状楕円形、長さ 3～5mm、幅 1.5～2.5mm、円頭で全縁である。花期は 9～10 月、花は枝中部の葉腋につき、無柄、がく筒は半球形で長三角形の短い裂片がある。雄蕊は 2 個である。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾：57b 愛西 (石原 淳 s.n., 2023-9-29)。隣接する岐阜県側にも生育しているという。

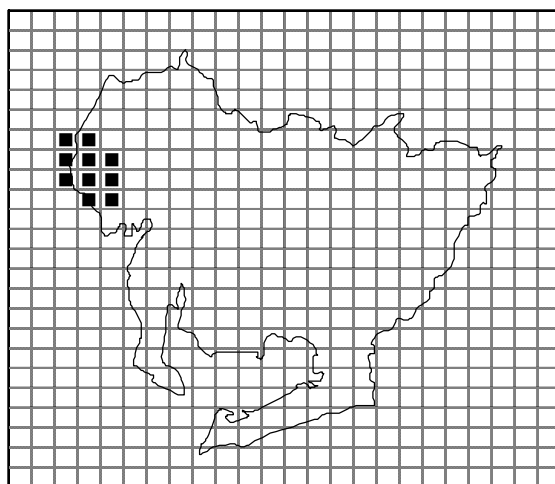
【国内の分布】

本州 (埼玉県、千葉県、長野県、岐阜県、愛知県、三重県、京都府)、四国 (香川県、高知県) から報告されているが、現存が確認できるのは木曾川の他は三重県の 1 か所だけらしい。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

感潮域の、満潮時は水没し、干潮時は干出する泥土上に生育する。事業者の委託による現地調査では、比高 0.7～1.9m のワンド・たまりに多く、流れの影響を受けやすい本流沿いの干潟には少ない傾向があると報告されている。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地			○	
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

1 か所に隣接して数百株と約 100 株の群落があり、周辺にも少数株が点在している (小型の植物なので個体数階級は 3) という。安定した環境であるが、河川整備事業が計画されているとのことで、その影響を受ける可能性がある。

【保全上の留意点】

「令和 4 年度に整備を終えた場所でも本種の生育が確認できたことから、伐採等の工事による改変を受けても、干潟や砂州といった生育基盤が創出・保全されれば、本種の生育は維持される可能性がある」と報告されている。本種の存在は事業者には意識されているので、それなりの配慮がなされるものと期待している。

【関連文献】

平新版 3 p.259.

(執筆 芹沢俊介)

クロキ *Symplocos kuroki* Nagam.

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 3、総点 16。従来鳥取県以西に分布とされてきた植物であるが、最近になって名古屋市内で大木が 1 本生育しているのが確認された。

【形態】

常緑性の小高木。若枝は稜があり、淡黄緑色、無毛である。葉は互生し、長さ 5~10mm の柄があり、葉身は長楕円形~狭倒卵形、長さ 5~7cm、幅 1.8~3cm、先端は鈍頭または鋭頭、辺縁の上部に不明瞭な波状の低鋸歯があり、革質、表面は光沢があり、両面とも無毛である。花期は 3~4 月、花は白色で葉腋に集まってつき、花冠は直径 8mm 程度、果実は長楕円形で長さ 10~13mm、黒熟する。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾: 50 名古屋北東部(長谷川泰洋 586, 2023-3-20, 花; 芹沢 101724, 2023-6-17, 果実)。

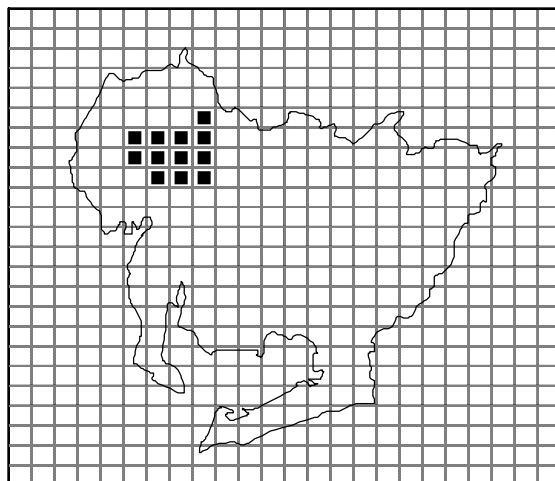
【国内の分布】

本州(鳥取県以西)、四国、九州。分布域に千葉県が含まれていることもあるが、大場(編)(2003)によれば「県内には確かな記録がない」という。

【世界の分布】

日本および朝鮮半島(済州島)。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

低地~丘陵地の林内や林縁に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

名古屋市千種区植田山の沢沿いの二次林内に、1 株だけだが本種としては大きな個体(樹高約 15m、胸高直径約 40cm) が生育している。周辺には 10 株以上の幼木が散在している。

【保全上の留意点】

個別的な保全が必要である。周辺に散在している幼木も、親木と合わせて保全を要する。

【特記事項】

従来自然分布は鳥取県以西とされてきた植物で、自生ならば著しい東限産地となる。しかし、本来の自生地ならばさまざまな大きさの個体が生育しているはずで、老大木 1 本というのは何とも不自然である。現地は何か植栽されるような場所には見えないが、古い時代の植栽に由来する可能性は否定できない。しかし、何はともあれ貴重なものであるから、このことは承知の上で評価対象とした。周辺の幼木は樹高 1m 程度のものが多く、比較的近年になって温暖化等の影響で発芽・生長が可能となったのかもしれない。

【引用文献】

大場達之(編), 2003. 千葉県の自然誌 別編 4 千葉県植物誌 p.445. 千葉県.

【関連文献】

保木本 1 p.99, 平新版 4 p.211.

(執筆者 芹沢俊介)

コタヌキモ *Utricularia intermedia* Heyne

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 4、人為圧階級 3、固有性階級 1、総点 16。温帯性の水草で、2020 年版では「愛知県では既知のすべての自生地で絶滅」と記述したが、藤岡でわずかに残存しているのが確認された。

【形態】

多年生の食虫性水草。茎は泥上をはい、多数の捕虫囊をつけた地中葉で固着する。水中葉は互生して重なり合い、長さ 1cm 程度、二叉状に分岐して扇形となり、捕虫囊はなく、裂片は幅 0.3～0.6mm で辺縁に鋸歯がある。花期は 6～9 月、高さ 5～15cm の花茎を水上に伸ばし、1～5 花をつける。花冠は黄色で直径 12～15mm、距は前向きで下唇とほぼ同長、がくは長さ約 3mm である。秋には茎の先端に直径 3～8mm の球状～楕円状の殖芽を作り、越冬する。

【分布の概要】

【県内の分布】

西：23 藤岡（芹沢 104127, 2024-7-9）。東：13 豊川（一宮町大木、芹沢 54046, 1989-10-29）、17 田原東部（田原町野田、芹沢 53624, 1989-9-27）にも生育していたが、これらの場所では消失した。16 豊橋南部（高師原清水池、鳥居喜一 2054, 1952-8-2, HNSM）、50 名古屋北部（田代町竹下、井波一雄 s.n., 1937-8-18, CBM233671）、51 名古屋南東部（天白区八事、浜島繁隆 1078, 1968-8-25）で採集された標本もある。豊橋北部の葦毛湿原にも現存するが、これは移入されたものである。

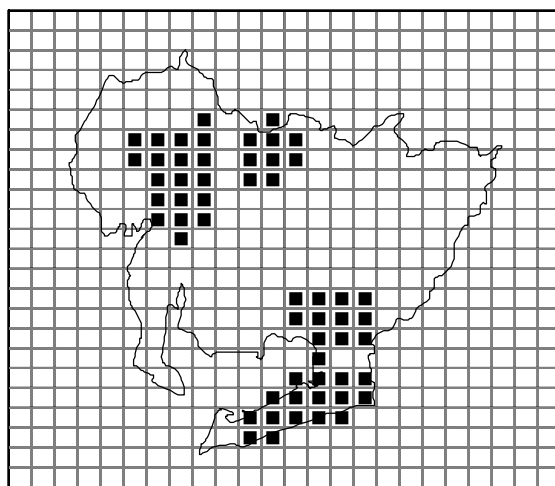
【国内の分布】

北海道、本州（三重県以北）、九州（大分県）に生育する。

【世界の分布】

北半球の温帯に広く分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

浅い池沼に生育する。愛知県の生育地は、いずれも湧水湿地中の浅い水たまりである。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地		○		
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

個体数はごく少ない。田原赤羽根では湿地の上に道路ができて水脈が切れ、絶滅した。

【保全上の留意点】

葦毛湿原のものは由来不明であったが、最近になって豊橋南部の細谷湿地から 1971 年 8 月 5 日に移植されたものという話を聞いた。しかし、それを裏付ける当時の記録等は確認できなかった。本種は愛知県の自生地ではまだ開花が確認されていないが、葦毛湿原では 2 回開花したとのことなので、最初の移植後他の人が栽培品等を投入した可能性もある。いずれにしても本種は葦毛湿原の自然という観点からは余計なもので、できれば除去が望ましい。本種の場合、愛知県で新たな自生地が発見される可能性は皆無ではないが、葦毛湿原のような付け加え行為が行われると、発見された自生地が保全に値するかどうか、判断がつかなくなってしまう。湿地はどれも同じではない。ないものは「ない」のがその湿地の個性であり、その「ない」という状態を壊す移入は自然破壊行為である。本種のような希少種の場合域外保全は無意味ではないが、その場合は公的な機関の手で、管理が行き届く場所で行わなければならない。

【特記事項】

今回再確認された場所は以前生育を確認していた場所のすぐ近くで、自生と思われるが、周辺にナガエモウセンゴケが多量に生育しているのは少し気になる。

【関連文献】

保草本 I p.122, 平新版 5 p.165, SOS 旧版 p.83.
角野康郎, 1994. 日本水草図鑑 p.152. 文一総合出版, 東京.

(執筆者 芹沢俊介)

モトマチハナワラビ *Sceptridium* sp.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 3、総点 15。本州中部に分布するシダ植物で、愛知県は分布域の北限に当たる。県内では生育地が少ない。

【形態】

常緑性のシダ植物。根茎は短く直立する。葉は年に 1 枚、秋に出て翌年の葉が展開する頃まで残存する。共通柄は長さ 3.5～8cm、栄養葉は長さ 7～15cm の柄があり、葉身は五角形、長さ 8～18cm、幅 11～24cm、やや 3 出葉的に 3 回羽状に深裂し、葉裂片は長楕円形で辺縁に欠刻状の鋸歯があり、表面は深緑色でやや光沢がある。孢子葉は長さ 15～25cm の柄があり、葉身は長さ 6～12cm、3 回羽状に切れ込む。孢子は 10 月下旬～11 月中旬に熟す。シチトウハナワラビに比べ、共通柄がやや短い傾向があり、葉の切れ込みが深く、裂片が細い。葉の切れ込みが深いため葉縁の鋸歯が顕著なように見えるが、オオハナワラビの葉縁の鋭鋸歯とは形状がやや異なる。同所に生育しているオオハナワラビに比べ、孢子はやや遅く成熟する。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾:37b 尾張旭(芹沢 86517, 2010-10-17)、
50 名古屋北部(芹沢 104596, 2024-11-14)。

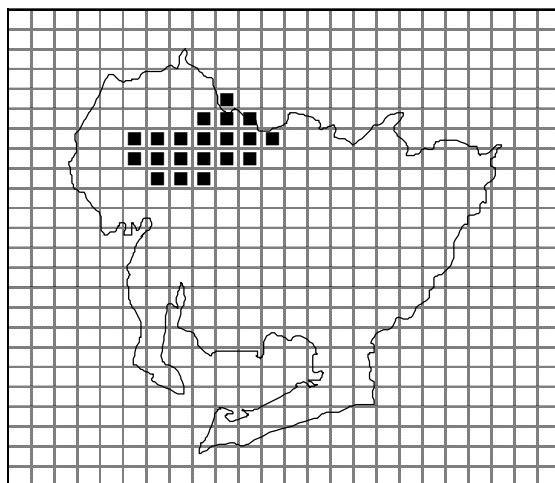
【国内の分布】

研究中の人がいるので、記述を避ける。

【世界の分布】

おそらく日本固有種と思われる。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

尾張旭の生育地はやや平坦な二次林内である。名古屋北部の生育地は常緑樹の多い林内である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

尾張旭では、森林公園内の 1 か所に、オオハナワラビと混生して、約 20 株の小群落がある。名古屋北部では保全緑地の小さい沢にそった林内に、オオハナワラビ、アカハナワラビ、本種とオオハナワラビの雑種の可能性がある大型の個体と混生して、数十個体が群生している。

【保全上の留意点】

どちらの生育地も保全されている場所であるが、名古屋北部の方は広場に接しているため、その拡張工事等で失われるおそれがある。

【特記事項】

尾張旭の植物は、2020 年版ではシチトウハナワラビに含めて掲載されている。2024 年のリスト案にも掲載されていないが、名古屋市で新しく発見された集団を検討したところ、シチトウハナワラビからは葉の切れ込みが深く、裂片が細いことで形態的には一応識別可能で、何らかの形で区別して掲載の方がよいと判断された。モトマチハナワラビとシチトウハナワラビの遺伝的關係は現在検討されているようだが、ここではとりあえず *Sceptridium* sp. として収録しておく。確実にシチトウハナワラビと判断される植物は愛知県では田原東部で確認されているだけで、レッドリストの評価は個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 3、総点 16、絶滅危惧 IA 類に変更される。

【関連文献】

現在のところ公表されている一般的な文献はない。

(執筆 芹沢俊介)

メヤブソテツ *Cyrtomium caryotideum* (Wall. ex Hook. et Grev.) C.Presl

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 14。今まで希少偶産種としてきた植物だが、2ヶ所目の産地が発見されたので評価対象に加えた。

【形態】

常緑性のシダ植物。根茎は斜上し、葉を束生する。新葉は晩秋に展開し、葉柄は長さ 30～40cm、基部に暗褐色で卵状楕円形～広披針形の鱗片を密生するが、上部では鱗片は小さく、ややまばらになる。葉身は単羽状複生、頂羽片は明瞭、側羽片は 2～7 対で短柄があり、卵形～狭長卵形、基部は円形～広楔形で多くの場合両側または前側に突起があり、先端は鋭尖頭、辺縁には細かい鋭鋸歯がある。胞子のう群は羽片裏側の辺縁部を除く前面につき、包膜は円形である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：8 鳳来北東部（小林 63026, 1997-12-28）。西：28 額田（芹沢 100055, 2021-11-18）。

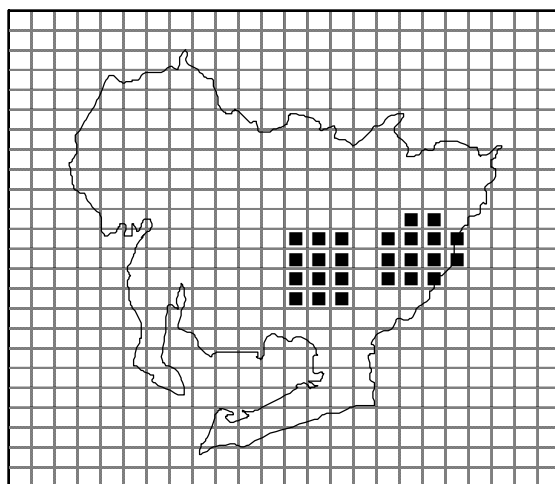
【国内の分布】

本州（東北地方南部以西）、四国、九州。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島（済州島）、台湾、中国大陆、フィリピン、南アジア。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

石灰岩地の林内や林縁に生育していることが多いが、愛知県の生育地はどちらも石灰岩地ではない。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

鳳来北東部では、山道の側溝状の場所に 1 株生育していた。額田でも山の中の道路わきに、1 株だけ生育していた。

【保全上の留意点】

評価対象としたが、やや偶産的であることに違いはない。消失しても、それは自然の変動内かもしれない。

【特記事項】

新葉が晩秋に展開し、胞子が冬にかけて成熟することで、同属の他種とは明瞭に異なっている。鳳来寺山周辺では他にも小群落があると報告されている（小林 2020）が、公開された標本室に標本が収蔵されておらず、更に同書には鳥居シダ園からの逸出が疑われるシダ植物がいくつか掲載されていることもあって、生育状況を含めて再確認が必要である。

【引用文献】

小林元男, 2020. 鳳来寺山・新城市の植物. 346pp. しんしろ山観会, 新城.

【関連文献】

平シダ p.163, 学シダ II p.430.

(執筆 芹沢俊介)

イワチドリ *Amitostigma keiskei* (Maxim. ex Franch. et Sav.) Schltr.

【評価理由】

全国的に減少傾向の著しいラン科植物で、2020 年版では「現存を確認できない」と記述したが、まだ生育しているという報告を受け、写真も確認した。現地確認はまだ行っておらず標本も採取できていないが、さしあたり残存と見なし、話をもとに定性的に絶滅危惧 IB 類と評価しておく。

【形態】

多年生草本。紡錘状に肥厚した根がある。茎は斜上し、高さ 5~15cm になる。葉は茎の中部に 1 個つき、長楕円形、長さ 3~7cm、幅 6~15mm、先端は鋭頭、辺縁は全縁、基部は茎を抱く。花期は 4~6 月、花は茎の上部に一方に傾いて数個つき、淡紅紫色、苞は披針形、長さ 4~10mm である。背がく片は楕円形、長さ 3.5~4.5mm、側がく片は斜長楕円形でやや短く、側花弁は斜卵形、背がく片とほぼ同長、辺縁に紅紫色の斑点がある。唇弁は長さ 10~12mm、大きく開出し、3 深裂して中央裂片の先端はさらに 2 裂し、各裂片は幅約 2mm、基部に紅紫色の斑点がある。距は白色、長さ 1.5~2mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

見せていただいた写真の撮影地は東三河(区画は公表しない)である。東：8 鳳来南東部の記録(小林 2019)もある。比較的最近では、西：23 藤岡(塚本威彦 149, 1992-6-14)と尾：45 犬山(平嶋 敏 452, 1989-5-9)でも生育が確認されている。どちらの場所も最近の調査では現存を確認できなかったが、十分に探索したわけではないので、残存の可能性は残されている。東：3 東栄(加藤等次 s.n., 1968-6-2)、12 新城(奥井道, 鳥居喜一 6139, 1966-5-1, HNSM)、西：19 旭(大原準之助 s.n., 1965-7-20)、25 豊田北西部(岡本英一 281, 1958-5-19)で採集された標本もある。

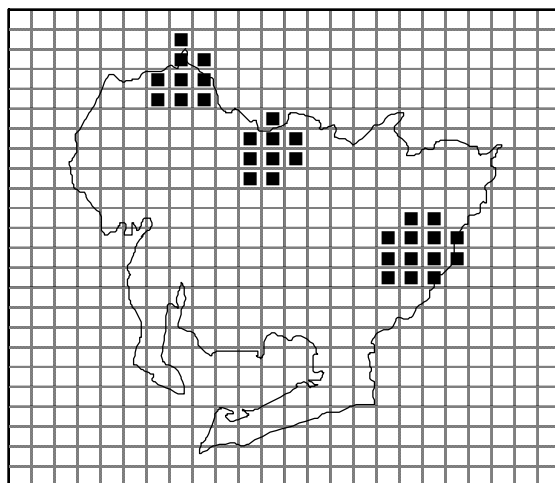
【国内の分布】

本州(中部地方、近畿地方)、四国。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

川沿いなどの湿った岩場に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

藤岡と犬山は、生育地としてはやや条件の悪い場所に、当ても辛うじて残存しているという状況であった。本種の場合、全国的には山草業者による商業的採取が問題とされることが多い。しかし山草業者による採取は、個体数があるレベル以下にまで減少すれば、採算がとれないため停止される。愛知県の状況は、すでにそのレベルを割り込んでいる。ここまで減少させたという点で商業的採取の責任は大きい。現在僅かに残存している集団に対する最大の脅威は、むしろ好事家の手で絶滅するまでくり返される、非商業的採取である。

【保全上の留意点】

基本的には国民共有の資産である自然物を個人の庭に取り込んでしまう山草愛好家のモラルが問題であるが、このような道義的な訴えだけでは絶滅を回避できない。当面は秘匿以外に有効な手がなく、分布情報の公表に際しては慎重な配慮が必要である。

【引用文献】

小林元男, 2019. 愛知県民の森の植物 p.28. 愛知公園協会県民の森, 新城。

【関連文献】

保草本Ⅲp.13, 平新版 1 p.182, 環境省 p.341, SOS 旧版 p.109+図版 29, SOS 新版 p.43,45.

(執筆者 芹沢俊介)

ハルザキヤツシロラン *Gastrodia nipponica* (Honda) Ohwi

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 2、人為圧階級 3、固有性階級 2、総点 14。湖西丘陵の静岡県側では以前から知られていた植物であるが、最近になって愛知県側でも生育が確認された。今回確認できたのは 2 ヶ所だが、その後他で見つかったという話も聞くので、あるいは集団数階級 3、総点 13、絶滅危惧 II 類が適切かもしれない。

【形態】

腐生の多年生草本。根茎は長さ 4~7cm、直径 3~7mm の屈曲した棒状になる。地上茎は根茎の先端から 1 本出て、高さ 5~10cm、2~3 個の膜質の鱗片葉をつける。花期は隣接する静岡県では 4 月中~下旬、茎の先端部に黒褐色の花を 1~6 個つける。苞は卵形、長さ 4~6mm である。花は 3 がく片が合着して長さ 1.7~2.5cm の鐘状になり、花柄は花時には長さ 1cm 以下であるが、花後著しく伸長して 25~35cm に達する。果実は 5 月中~下旬に熟し、細長い楕円形、長さ 2.5~3.5cm、直径 6~8mm、暗褐色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：12 新城（芹沢 104044, 2024-6-4）、15 豊橋北部（芹沢 104048, 2024-6-4）。

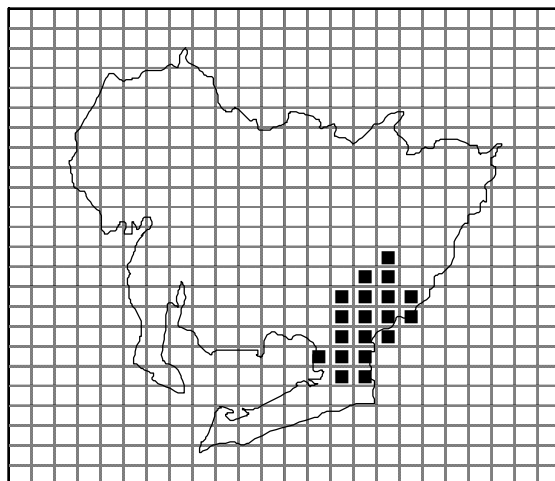
【国内の分布】

本州（静岡県以西）、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本および台湾。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

通常は暖帯~亜熱帯の常緑広葉樹林下に生育しているというが、愛知県および湖西丘陵静岡県側の自生地はいずれも発達した二次林か造林地である。クロヤツシロランと異なり、竹林では見えない。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

見せていただいた範囲では、新城は 20 株程度、豊橋は数株であった。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全する必要がある。写真撮影等による踏み荒らしにも注意が必要である。

【関連文献】

保草本Ⅲp.27, 平新版 1 p.203.

(執筆者 芹沢俊介)

ヤクシマヒメアリドオシラン *Kuhlhasseltia yakushimensis* (Yamam.) Ormerod

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 3、生育環境階級 2、人為圧階級 3、固有性階級 3、総点 14。最近になって愛知県での生育が確認された小型のラン科植物である。

【形態】

小型の多年生草本。茎の下部は地上を横に這い、先端部は立ち上がって開花時に高さ 7~10cm になり、基部に 2~3 枚の葉を互生する。葉は長さ 2~5mm の柄があり、葉身は卵形、長さ 5~15mm、幅 4~8mm、先端は鋭頭、暗緑色で無毛である。花期は 7 月中~下旬、花は茎の先端部に総状に 1~5 個つき、がく片と側花弁は互いに接してつき、長さ約 5mm、唇弁は長さ 7~8mm で白色、基部は袋状の距となり、舷部は広卵状倒三角形で先端は深く 2 裂する。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：7 設楽東部（中西普佐子 4875, 2020-7-23）。西：5 稲武（芹沢 104176, 2024-8-5）、21 下山（芹沢 104167, 2024-7-30）。

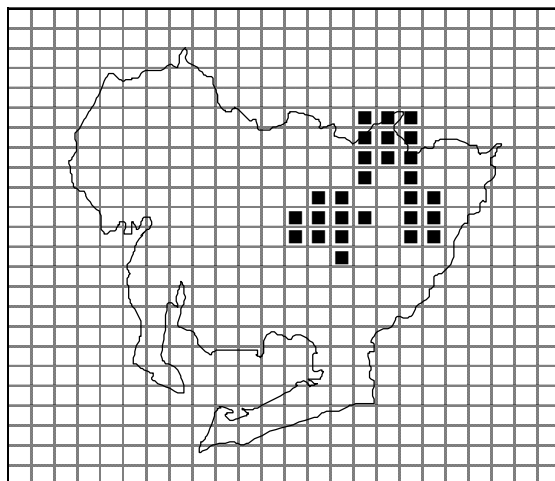
【国内の分布】

本州（中部地方、近畿地方）、四国、九州、

【世界の分布】

日本~中国大陸、フィリピン。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

設楽東部では、山腹斜面にあるよく育った造林地の湿った林床の、スギの根元、岩陰、流れのわきなどに生育している。下山も沢沿いの造林地だが、稲武は尾根の造林地である。一般には「暖温帯の林内に生育」と言われるが、愛知県では標高 520~930m のやや冷涼な場所に生育している。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

個体数はそれほど多くない。過去からの増減は不明だが、現在のところ特に減少していることはなさそうである。

【保全上の留意点】

生育地の森林を保全する必要がある。また、小型で目立たない植物だがそれでもラン科なので、生育地点の詳細な情報は公表を控える必要がある。

【特記事項】

比較的近年になって愛知県での生育が確認された種類であるが、とにかく小さくて目立たない植物で、「ここ！」と教えてもらわなければなかなか見つからない。「他にもある」という話も聞くので、一層の探索が必要である。

【関連文献】

平新版 1 p.209.

(執筆者 芹沢俊介)

ムカゴサイシン *Nervilia nipponica* Makino

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 2、人為圧階級 3、固有性階級 2、総点 14。最近になって愛知県での生育が確認された小型のラン科植物である。

【形態】

多年生草本。地下に球茎があり、走出枝を出してその先に子球をつける。葉は 1 枚、花後に出て長さ 2~10cm の柄があり、葉身はやや五角形状の円心形、大きいものは長さ、幅とも 5cm に達するというのが愛知県のものは 2.5~3.5cm である。花期は 5~6 月、花は高さ 7~10cm の花茎の先端に 1 個つき、筒状でほとんど開かず、長さ 1.5cm 程度、暗紅紫色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：3 東栄 (芹沢 101580, 2023-5-28)。西：21 下山 (芹沢 104591, 2024-10-29)。

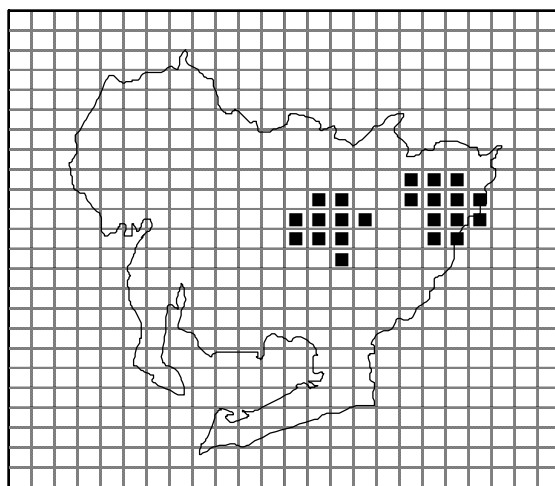
【国内の分布】

本州 (関東地方以西)、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本および朝鮮半島 (済州島)。

要配慮地区図



【生育地の環やや湿った境／生態的特性】

一般的には暖帯林の林床に生ずるというが、愛知県では 2 ヶ所とも造林地のやや湿った林床に生育している。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

東栄では近接していくつかの集団があり、葉だけの株は合わせて 100 を超えるが、開花個体は 2023 年に探索した限りでは 1 株しか見つからなかった。下山では葉だけのものが 2~3 株が確認されただけである。個体数階級は、開花個体だけを数えれば 4 だが、とりあえず 3 としておく。採取圧がある植物とは思えないが、どちらの産地も環境アセスメントの調査で発見されたものであり、そのため人為圧階級は 3 とした。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全することが望ましいが、造林地なのでそのうちに伐採されると思われる。特殊な環境の場所に生育しているわけではないので、更に新しい産地を探索する必要がある。

【特記事項】

葉はおよそラン科とは思えない形状をしている。

【関連文献】

保草本Ⅲp.29, 平新版 1 p.216-217.

(執筆者 芹沢俊介)

カゲロウラン *Zeuxine agyokuana* Fukuy.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 2、人為圧力階級 3、固有性階級 2、総点 14。最近になって愛知県での生育が確認された小型のラン科植物である。

【形態】

常緑性の多年生草本。茎の下部は地上を匍匐して節から根をだし、上部は直立して高さ 8~16cm になる。葉は茎の中部に 3~5 個互生し、葉柄は短くて基部は鞘となり、葉身は卵形~卵状楕円形、長さ 2~4cm、幅 1~2cm、先端は鈍頭、両面無毛で表面には光沢がある。花期は 10 月、花は茎の先端部に 2~6 花つき、ほぼ無柄、苞は狭卵形で長さ 3~5mm、子房は長さ 7~10mm、花被片は長さ 3~4mm でやや紅色を帯びた褐色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：12 新城（芹沢 104558, 2024-10-18）、
15 豊橋北部（芹沢 104443, 2024-10-2）。

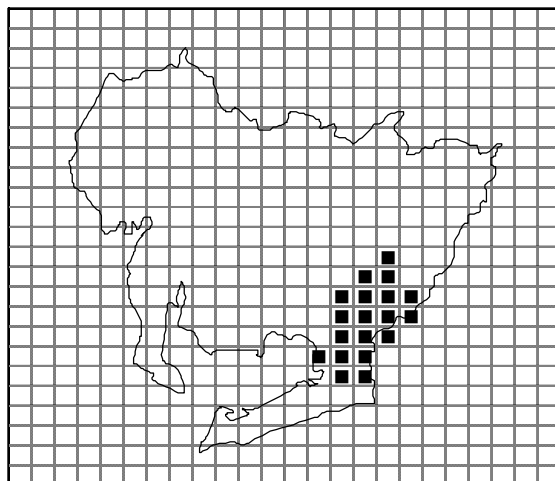
【国内の分布】

本州（関東地方以西）、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本、台湾、中国大陸中南部、ヒマラヤ。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

新城は尾根の林内、豊橋は沢からやや離れた斜面中腹の、二次林内ではあるが伐採を免れた常緑樹の下などに生育している。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

2ヶ所とも小群落である。現在のところ、特に減少しているようには見えない。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全する必要がある。目立つ植物ではないが、豊橋の方は他植物の写真撮影に訪れる人が多いようなので、踏みつけに注意する必要がある。

【関連文献】

平新版 1 p.231.

(執筆者 芹沢俊介)

アズマツメクサ *Tillaea aquatica* L.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 4、人為圧階級 2、固有性階級 2、総点 15。小型の低湿地性植物で、愛知県では最近になって福岡（2024）により生育が報告された。

【形態】

小形の 1 年生草本。茎は基部で分枝し、基部は地表を貼って節から根を出し、中上部は立ち上がって長さ 4～8cm になる。葉は対生し、無柄、葉身は線状披針形で、長さ 5～8mm、幅 1mm 程度である。花期は 4～7 月、花は茎の上部の葉腋に 1 個ずつつき、長さ 1.5mm 程度、無柄、がく裂片は 4 個で卵形、花弁も 4 個で白色であるが、泥を被って細部が観察できないことも多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾：57b 愛西（福岡義洋 7191, 2021-5-29）。隣接する岐阜県側にも生育しているという。

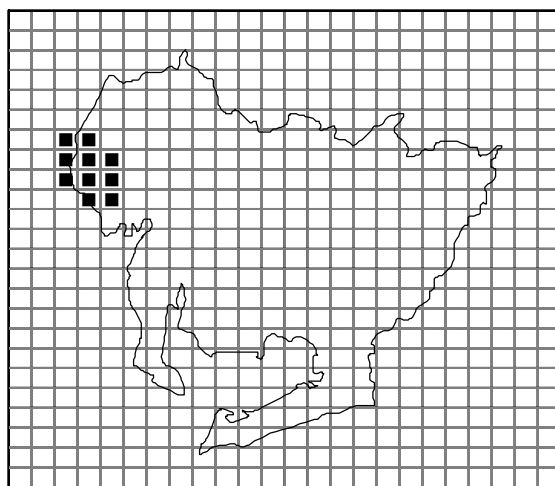
【国内の分布】

北海道、本州、四国。

【世界の分布】

北半球の温帯に広く分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

感潮域の、水の流れの影響をあまり受けず、満潮時は水没し、干潮時は陸地となる日当たりのよい場所である（福岡 2024）。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地			○	
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

生育地は 1 カ所だけで、株数は多く見積もっても 250 株程度（小型の植物なので個体数階級は 3）であるという（福岡私信）。安定した環境であるが、すぐ上流で橋の建設が予定されているとのことで、その影響を受ける可能性がある。

【保全上の留意点】

大河川下流部の低湿地的環境を全体として保全する必要がある。

【引用文献】

福岡義洋, 2024. 愛知県の本曾川にもアズマツメクサを記録する. 水草研究会誌(116): 33-35.

【関連文献】

保草本Ⅱp.158-159, 平新版 2 p.229.

（執筆者 芹沢俊介）

ゲンバイヒルガオ *Ipomoea pes-caprae* (L.) Sweet

【評価理由】

個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 2、総点 15。熱帯系の海浜植物で、愛知県では最近になって分布してきたと思われる。もともとは 1 株と思われるがある程度の面積に広がっているため、定着していると判断して評価の対象とした。

【形態】

多年生草本。茎は地表を長く這い、古いものは砂中に埋まる。葉は軍配形、長さ、幅とも 3~6cm、先端は凹頭、基部は心形~切形、全縁で質は厚い。花期は愛知県では 8~9 月、花は長さ 4~6cm の花序枝の先に 1~2 個つき、花冠は紅紫色で直径 4~5cm、果実は扁球形で直径 1.5cm 程度である。種子は海流に乗って散布される。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：16 豊橋南部（表浜海岸，中西普佐子 5580, 2022-8-28; 芹沢 101209, 2023-4-22）。

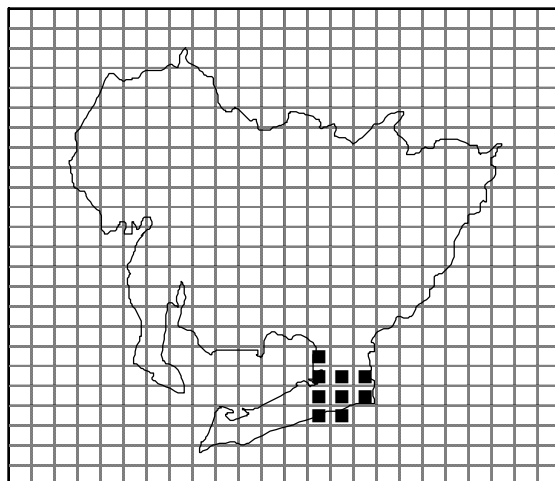
【国内の分布】

本州（紀伊半島）、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

熱帯~亜熱帯に広く分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

海岸の砂地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				○
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

おそらくもとは 1 個体と思われるが、現在は 10m 四方近くに広がっている。極度に寒い冬が来れば、消失する可能性がある。

【保全上の留意点】

個別的な保全が必要である。

【特記事項】

「本州の海岸にも種子が流れ着いて発芽するが、寒さのため冬には枯れて定着しない」（米倉 2017）と言われているが、豊橋のものは確実に越冬している。芹沢 101209 は春期に地下の匍匐茎から伸長した植物体である。

【引用文献】

米倉浩司, 2017. ヒルガオ科. 大橋広好（編）, 新版日本の野生植物 5: 23-32. 平凡社, 東京..

【関連文献】

保草本 I p.203, 平新版 5 p.29.

（執筆者 芹沢俊介）

チャボハナヤスリ *Ophioglossum parvum* M.Nishida et Kurita

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 3、生育環境階級 2、人為圧階級 3、固有性階級 2、総点 13。小型のシダ植物で、愛知県では最近になって生育が確認された。

【形態】

夏緑性のシダ植物。根茎は短く、2～5本の葉を出す。共通柄は通常長さ1cm以下、基部が土中にあっても1.5cm程度、栄養葉は地表に接して出て無柄またはごく短い柄があり、葉身は通常楕円形、稀に卵形、長さは通常1～2cmだが時に5mm程度のこともあり、幅は0.3～1cm、先端は鋭頭、基部も次第に狭くなることが多い。孢子葉は通常長さ5～8cmの柄があるがこれも1cm程度のこともあり、孢子のう穂は長さ1～2cmである。葉が春から秋まで展開するため、孢子成熟期は長期間にわたる。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：2 豊根（芹沢 96268, 2020-9-6）、18 田原西部（芹沢 104036, 2024-6-1）。西：26 豊田南西部（芹沢 100296, 2022-5-26）。尾：42a 阿久比（芹沢 102992, 2023-10-6）。

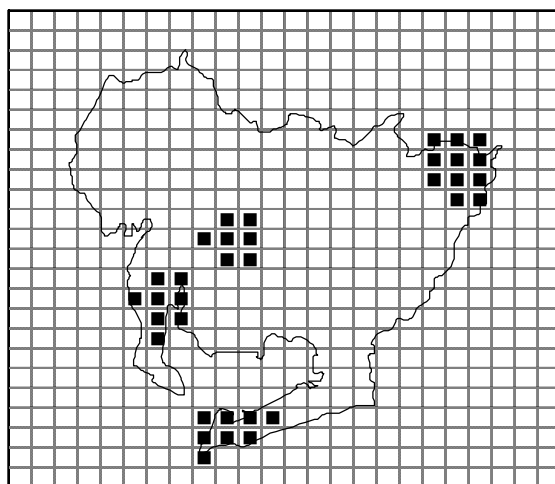
【国内の分布】

本州（伊豆諸島青ヶ島、静岡県～三重県）、九州（中南部）。

【世界の分布】

日本、台湾。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

本来は半裸地状の草地に生育する植物と思われるが、近年九州中南部各地の人里近くの公園などで生育が確認されている。愛知県の場合、田原西部は公共施設前の芝生、豊田南西部は公園の草地で、この2ヶ所は九州と同様の環境だが、阿久比は神社前やや明るい林内である。豊根は標高410mの林道わきの草地で、本種としてはやや例外的な、かなり山地寄りの生育地である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○	○	○	
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

どの場所も小群落だが、阿久比はやや個体数が多かった。

【保全上の留意点】

生育地の状況から見て個別的な保全は困難と思われるが、その一方で注意深く探せば、新たな産地が発見される可能性もある。

【特記事項】

ハマハナヤスリからは、葉数がやや多くて1枚のことはほとんどなく、栄養葉は地表に接してつき、長さの割に幅が広いことで区別される。一般に独立種とされているが、熊本県氷川町では栄養葉のあるもの（芹沢 90382, 2015-7-28）とないもの（同 90381）が同所的に生育しており、青ヶ島でも同様らしく、実際にはサクラジマハナヤスリ *O. kawamurae* Tagawa の栄養葉を持つ型の可能性がある。通常は栄養葉を持つハマハナヤスリでも、稀に栄養葉のないもの（例：岐阜県御嵩町前沢、芹沢 55698, 1990-6-27 の中の一部個体）がある。2024年のリスト案では絶滅危惧ⅠB類として掲載したが、再検討の結果評価が変更された。

【関連文献】

平シダ p.63, 学シダ I p.289.

（執筆者 芹沢俊介）

ナンカイヌリトラノオ *Asplenium serratipinnae* T.Fujiw. et Watano

【評価理由】

個体数階級 2、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧力階級 2、地域固有性 2、総点 13。分布域の北限になる植物で、愛知県では集団数が極めて少ない。知多にヌリトラノオの類が生育していることは以前から知られていたが、最近になって新種として記載された (Fujiwara et al. 2020) ので、レッドリストに加えることにした。

【形態】

常緑性のシダ植物。根茎は短く、葉を束生する。葉柄は長さ 2~12cm、紫褐色である。葉身は線形、長さ 15~35cm、幅 3~6cm、単羽状複葉、側羽片は 15~30 対で、長さ 1.8~3cm、幅 5~10mm、ほとんど無柄、基部前側は耳状、時に裂片状になり、辺縁には顕著な鋸歯がある。中軸は紫褐色で、先端に無性芽をつける。胞子のう群は各羽片の中肋と辺縁の中間に前側は 5~6 個、後側は 3~5 個、基部裂片にも少数つき、長さ 1.5~2.5mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

西：36 西尾南部 (村松 34765, 2023-9-26)。
尾：41b 知多 (芹沢 99671, 2021-10-5)、44a 美浜 (堀田善久 s.n., 1992-1-3)。

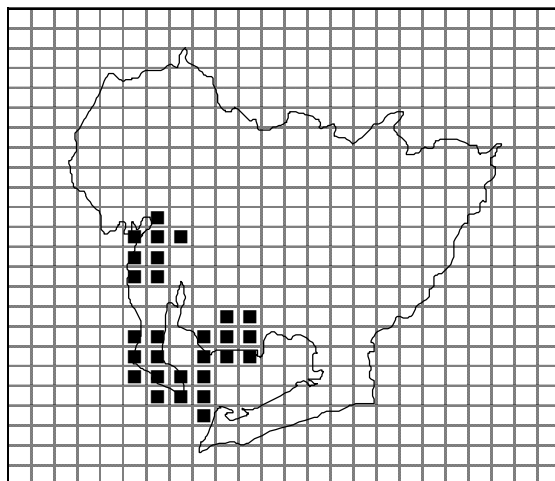
【国内の分布】

本州 (伊豆諸島、伊豆半島以西)、四国、ナ

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

知多では常緑樹林内の斜面に生育している。美浜の生育環境は不明である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

知多の生育地は 1 箇所だけだが、そこでは個体数は多い。市街地に近い場所だが、現在のところ特に減少していることはなさそうである。美浜では、2021 年にざっと調査した範囲では確認できなかった。ゴルフ場建設により失われた可能性が高いが、どこかに残存しているかもしれない。西尾南部は 1 株生育していただけらしい。

【保全上の留意点】

生育地の森林は一応保全されているが、林内の整備などにより失われることがないよう、特に注意が必要である。

【特記事項】

ヌリトラノオ 2 倍体とカミガモシダの交雑に由来する複 2 倍体種である。東三河ではまだ確認されていないが、湖西丘陵の静岡県側にはある (標本：三ヶ日町、芹沢 78268, 2002-10-2)。

【引用文献】

Fujiwara, T., J. Ogiso, S. Matsumoto and Y. Watano, 2020. *Asplenium serratipinnae* (Aspleniaceae: Polypodiales), a new allotetraploid species in the *A. normale* complex.

【関連文献】

現在のところ一般的な図書には掲載されていない。

(執筆者 芹沢俊介)

ナガオノキシノブ *Lepisorus rufofuscus* T.Fujiw.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 13。山地性の小型の着生植物で、愛知県では生育地も個体数も少ない。

【形態】

常緑性のシダ植物。根茎は長く（時にやや長い程度のこともある）這い、直径 1.5～2.5mm、三角状披針形で長さ 2.5～3mm、黒褐色で辺縁は淡色の鱗片におおわれる。葉は 2～5mm 間隔、時にはそれ以上離れて出て、葉柄は長さ 0.5～2cm、紫色は帯びない。葉身は線状披針形、長さ 15～20cm、幅 4～7mm、先端はやや尾状に伸び、質は比較的薄い。新葉は夏に展開し、胞子のう群はやや楕円形、葉身先端部（尾状部を除く）の中肋と辺縁の間に 1 列に並び、若時小鱗片におおわれる。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：2 豊根（村松 12863, 1993-7-10）、4 津具（芹沢 78769, 2003-8-24）。西：5 稲武（面ノ木峠、芹沢 28260, 1978-8-4）で採集された標本もある。

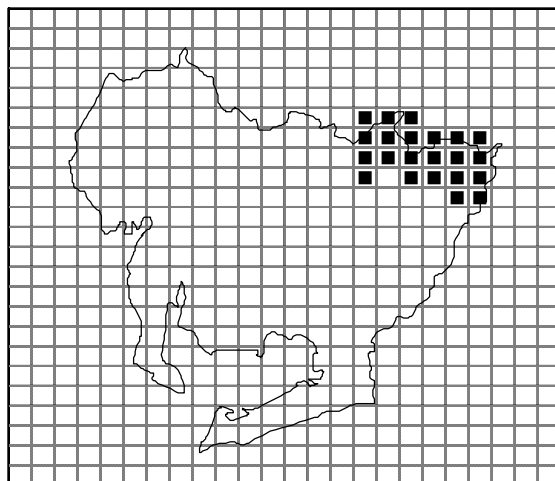
【国内の分布】

北海道、本州、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の落葉広葉樹の樹幹に着生していることが多い。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩		○		
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

どの場所も、個体数はそれほど多くなかった。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全する必要がある。

【特記事項】

面ノ木峠は、その後あまり注意しておらず標本も採取していないため集団数に含めていないが、どこかに残存している可能性は高いと思われる。レッドデータブックあいち 2020 には掲載されていないが、再検討の結果愛知県では意外に少なく、収録するのが適切と判断された。

【関連文献】

平シダ p.266, 学シダ II p.463.

(執筆者 芹沢俊介)

ヒトツバハギ *Flueggea suffruticosa* (Pall.) Baill.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 3、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 12。愛知県では以前は時折見かけた種類であるが、近年見る機会が減少している。

【形態】

落葉性の低木。高さ 2～3m になる。葉は互生し、3～6mm の柄があり、葉身は長楕円形、長さ 4～7cm、先端は鋭頭または鈍頭、基部はくさび形、辺縁は全縁で小さく波打ち、両面無毛、表面は緑色、裏面は白色を帯びる。花期は 6～8 月。雌雄異株で、雄花は葉腋に多数束生し、雌花は葉腋に 1～5 個つく。蒴果は扁球形で、直径 4～5mm になる。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：15 豊橋北部（芹沢 42046, 1985-9-9）、17 田原東部（芹沢 78206, 2002-10-3）、18 田原西部（小林 44490, 1993-6-19）。尾：37a 瀬戸（日比野修 5187, 2000-8-27）、48 春日井（山田果与乃 734, 2001-8-29）、50 名古屋北東部（芹沢 77892, 2002-7-1）。

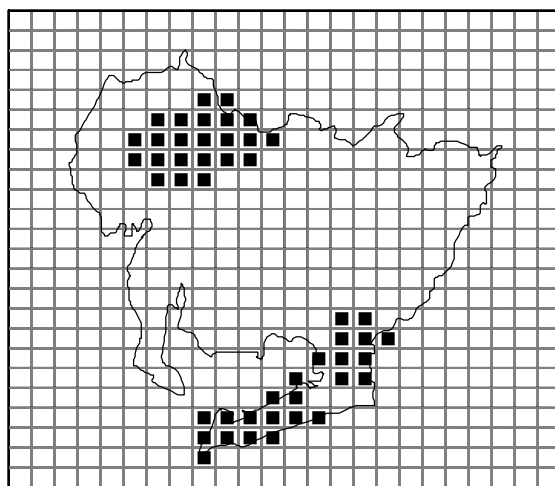
【国内の分布】

本州（中部地方以西）、四国、九州。

【世界の分布】

日本および朝鮮半島。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

丘陵地の林縁や疎林内、草地などに生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩		○		
湿地				
水域				

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地の林縁や疎林内、草地などに生育する。

【現在の生息状況／減少の要因】

もともとそれほど多くはないがそれでも以前は時折見かけた種類で、名古屋市のレッドデータブックを作成していて、改めて県内全域でも最近ほとんど見ていないことに気づいた種類である。個体数階級と集団数階級は見込み値である。本種が生育できるような草地環境が少なくなったことが減少の要因と思われる。

【保全上の留意点】

まずは確実に残存している場所を探索する必要がある。残存している場所を見つけたら草刈りなどの草地保全策を検討する必要があるが、現実問題としては困難かもしれない。

【特記事項】

和名は、全体にハギに似ているが葉が単葉だからである。2024 年のレッドリスト案では準絶滅危惧として掲載したが、再検討の結果評価が変更された。

【関連文献】

保木本 I p.339, 平木本 I p.263.

(執筆者 芹沢俊介)

メグスリノキ *Acer maximowiczianum* Miq.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 3、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 12。愛知県では個体数が少ない。開花結実を確認していないが、もともと結実することが稀な植物なので、県内に定着していることは確実である。

【形態】

落葉性の高木。高さ 20m 以上になるが、愛知県のものはそれほど大きくない。葉は対生し、3 小葉からなり、頂小葉は長さ 8~14cm、幅 3~7cm、長さ 5~12mm の柄があり、上半部に低い鋸歯があり、裏面に毛が多い。花は 5 月に咲き、果実が大きく翼と共に長さ 4~5cm になるが、愛知県ではまだ花も果実も見えていない。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：1 富山（瀧崎 37116, 2022-9-4, T）、2 豊根（加藤等次 3575, 1993-8-24）、3 東栄（芹沢 63580, 1992-9-18）、4 津具（小林 52171, 1994-6-18）、9 鳳来南部（小林 29405, 1985-11-12）。西：5 稲武（鈴木 学 1368, 1983-6-14）、19 旭（小林 43200, 1993-5-23）。

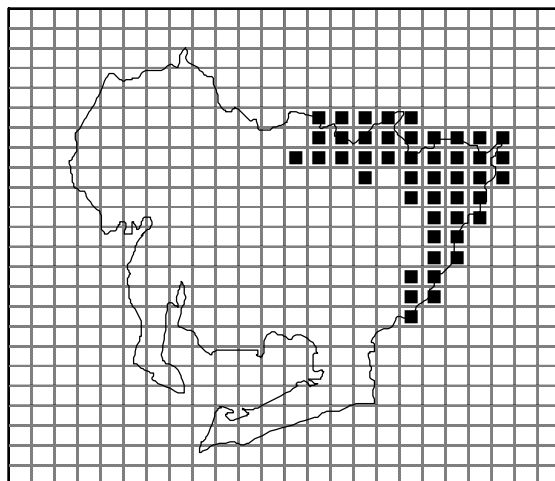
【国内の分布】

本州（宮城県以南）、四国、九州。

【世界の分布】

日本および中国大陸。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の落葉広葉樹林内に生育している。沢沿いにも尾根近くにも見られるが、極相に達した自然林内には生育していない。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

点在しているが、個体数はもともと少なかった。最近は見られる機会がさらに減少している。

【保全上の留意点】

本種のような出現頻度の低い植物は、なかなか効果的な保全策を立てることができない。あえて言うならば、山地の林を全体的に保全する必要がある。

【関連文献】

保木本 I p.287, 平新版 3 p.296-297.

(執筆者 芹沢俊介)

ホソバノヤマハハコ

Anaphalis margaritacea (L.) Benth. et Hook.f. var. *angustifolia* (Franch. et Sav.) Hayata

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 3、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 12。草性植物で、近年減少傾向が著しい。

【形態】

夏緑性の多年生草本。根茎は長く匍匐し、先端から 1～2 本の地上茎を出す。地上茎は高さ 35～80cm、先端部でのみ分枝することが多いが、中部から多くの枝を出すこともある。葉は互生し、線状披針形、長さ 7～15cm、幅 3～8mm、辺縁は多少なりとも裏側に巻き、表面は無毛または薄く毛があり、裏面は灰白色の綿毛を密生する。花期は 7～9 月、頭花は茎や枝の先端部に集まってつき、直径 5～6mm、総苞片は 4～5 列で基部を除き白色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：1 富山（芹沢 67304, 1993-9-2）、2 豊根（加藤等次 3798, 1993-9-19）、3 東栄（芹沢 87369, 2011-9-23）、4 津具（芹沢 70588, 1994-8-31）、6 設楽西部（芹沢 83188, 2008-9-6）、7 設楽東部（芹沢 63098, 1992-9-4）、11 作手（芹沢 67997, 1993-9-24）。西：5 稲武（芹沢 67236, 1993-9-1）、19 旭（芹沢 84954, 2009-9-19）、20 足助（塚本威彦 2027, 1996-7-25）、22 小原（鳥居ちゑ子 457, 1993-8-15）、24 豊田東部（畑佐武司 2666, 2011-11-11）。尾：48 春日井（太田さち子 856, 1993-9-26）。25 豊田北西部（猿投山、岡本英一 821, 1958-6-23）で採集された標本もある。56b 大治（新大正橋上、芹沢 70010, 1994-7-1）でも採集されているが、これは明らかに移入である。

【国内の分布】

本州（中部地方以西）、四国、九州。

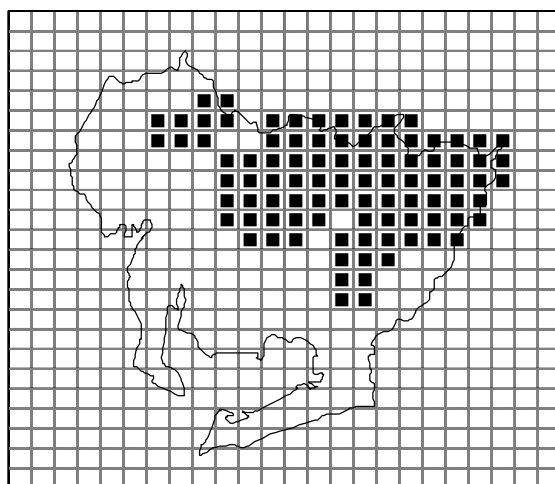
【世界の分布】

日本および中国大陸。種としてはアジア大陸東部～北アメリカに分布する。

【生育地の環境／生態的特性】

山地の草地や林縁に生育する。

要配慮地区図



	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

1990 年代前半にはあちこちで見かけた植物だが、2000 年以降に採集された標本は少なく、最近になって探してみても（十分探索したわけではないが）全く見当たらない。個体数階級と集団数階級は見込み値である。生育環境自体は残されているので、ニホンジカによる食害が減少の原因と思われる。

【保全上の留意点】

まずは確実に残存している場所を探索する必要がある。残存している場所を見つけたら食害対策を講じる必要があるが、ニホンジカの個体数調整以外、有効な手はないかもしれない。

【特記事項】

狭義ヤマハハコは愛知県では 4 津具（小林 38432, 1992-7-26）で採集されているが、移入の疑いもあり、再確認が必要である。

【関連文献】

保草本 I p.75, 平新版 5 p.343.

（執筆者 芹沢俊介）

オオモミジガサ *Miricacalia makinoana* (Yatabe) Kitam.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 13。山地性のキク科植物で、最近見る機会が減少している。

【形態】

夏緑性の多年生草本。根茎は塊状である。茎は直立して分枝せず、高さ 50～80cm、茎葉は 3 枚、最下のものは長さ 12～20cm の柄があり、葉身はしばしば多少盾状につき、円形、直径 25～35cm、掌状に 9～11 裂し、裂片は更に大きな鋸歯状に切れ込み、先端は鋭尖頭となる。次の葉も比較的大きいが、最上のものは小さい。花期は 7～8 月、頭花は茎の上部に総状に 5～11 個つき、総苞は長さ 1.5cm 程度、総苞片は 1 列、小花は 20 個程度で花冠は黄色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：2 豊根（芹沢 77887, 2002-8-25）、4 津具（小林 45712, 1993-7-31）。西：20 足助（塚本威彦 2009, 1996-7-21）。

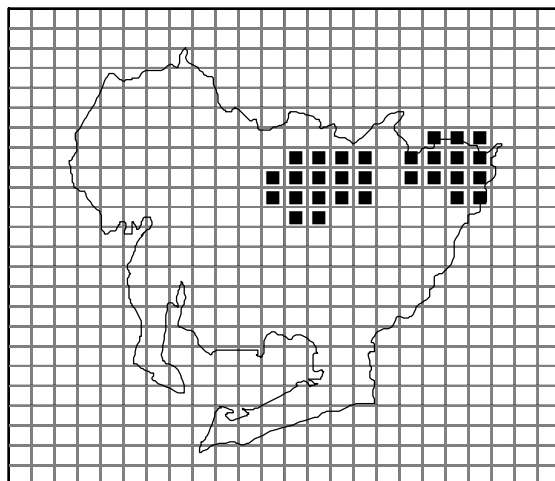
【国内の分布】

本州（東北地方南部以西）、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の沢沿いの落葉広葉樹林内に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩		○		
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

以前は三河山地の数カ所に生育していたが、最近になって探してみると（十分探索したわけではないが）見当たらない。個体数階級と集団数階級は見込み値である。生育環境自体は残されているので、ニホンジカによる食害が減少の原因と思われる。

【保全上の留意点】

まずは確実に残存している場所を探索する必要がある。残存している場所を見つけたら食害対策を講じる必要があるが、本種の場合もニホンジカの個体数調整以外、有効な手はないかもしれない。

【関連文献】

保草本 I p.50, 平新版 5 p.300.

（執筆者 芹沢俊介）

ヤマタイミンガサ *Parasenecio yatabei* (Matsum. et Koidz.) H.Koyama

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 3、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 12。山地性のキク科植物で、最近見る機会が減少している。

【形態】

夏緑性の多年生草本。長い匍匐茎を出す。茎は直立し、高さ 60～80cm、茎葉は 2～3 枚で、最下のは長さ 10～15cm の柄があり、葉身は円形、幅 20～30cm、掌状に 7～9 裂、裂片は更に 2～3 裂し、辺縁に鋭鋸歯があり、先端は鋭尖頭となる。花期は 7～9 月、頭花は円錐状に多数ついて斜上し、総苞は長さ 8～10mm、総苞片は 1 列、小花は 2～6 個、冠毛は汚白色で、総苞の外に伸びる。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：2 豊根（芹沢 102428, 2023-9-2）、4 津具（小林 38441, 1992-7-26）、6 設楽西部（芹沢 83174, 2008-9-6）。

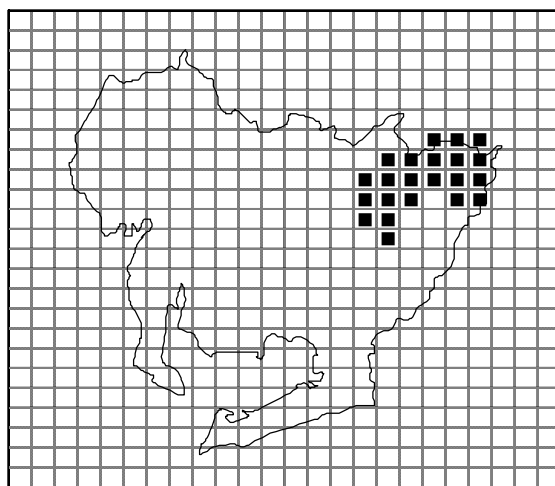
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の落葉広葉樹林内に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

以前は三河山地の数カ所に生育していたが、最近豊根で岩陰にある小群落に出会って、改めて最近ほとんど見ていないことに気付いた植物である。過去に確認されている場所を十分探索したわけではないので、個体数階級と集団数階級はとりあえずそれぞれ 3 としておいた。生育環境自体は残されているので、ニホンジカによる食害が減少の原因と思われる。

【保全上の留意点】

ニホンジカの個体数調整が必要と思われる。

【特記事項】

頭花の小花が 5～6 個のものはタイミンガサ（狭義）、2～4 個のものはニシノヤマタイミンガサ var. *occidentalis* (F.Maek. ex Kitam.) H.Koyama として変種の階級で区別されることが多いが、愛知県ではこの 2 つが明確に区別できるかどうかを含めて集団レベルでの解析を行っていないので、ここでは便宜的に両者を一括して掲載した。

【関連文献】

保草本 I p.49, 平新版 5 p.303.

（執筆者 芹沢俊介）

ウラギク *Tripolium pannonicum* (Jacq.) Schur

【除外理由】

個体数階級 2、集団数階級 2、生育環境階級 3、人為圧階級 3、固有度階級 2、総点 12。塩湿地性の植物で、愛知県では以前は生育地も個体数も多く、今まで国リストと評価してきたが、近年減少傾向が著しい。

【形態】

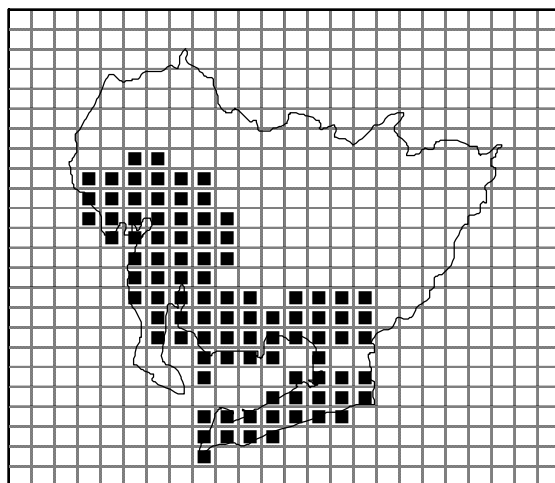
越年生草本。茎は直立して上方で分枝し、高さ 40~80cm になる。葉は互生し、無柄、葉身は披針形、長さ 6.5~15cm、幅 0.6~1.5cm、先端は鋭頭、基部はやや茎を抱き、無毛で肉質である。花期は 8~11 月、茎の上部に、多数の頭花を散房状につける。頭花は直径 2.5~3cm、総苞は筒状で長さ約 7mm、総苞片は 3 列にならび、外片は披針形で長さ 2.5~3mm、鈍頭、辺縁に短い毛があり、内片は円頭で紫色をおびる。舌状花の花冠は淡青紫色で、舌部は長さ 7~10mm である。そう果は狭長楕円形、長さ 2.5~3mm、扁平で有毛、冠毛は花時には長さ 5mm 程度であるが、果時には 14~16mm に伸びる。

【分布の概要】

【県内の分布】

東: 13 豊川 (小林 65483, 1998-11-15)、14 蒲郡 (小林 58662, 1995-11-3)、16 豊橋南部 (芹沢 90801, 2015-10-12)、17 田原東部 (芹沢 78356, 2002-10-24)、18 田原西部 (芹沢 78359, 2002-10-24)。西: 32a 刈谷 (芹沢 71360, 1994-10-25)、34a 高浜 (芹沢 71363, 1994-10-25)、34b 碧南 (中村さとこ 1108, 1993-10-19)、35 西尾北部 (中根幸司 1900, 2007-10-20)、36 西尾南部 (中根幸司 1927, 2007-10-20)。尾: 40b 東浦 (中村裕治 1286, 1994-10-14)、41a 東海 (清水政美 s.n., 1999-11-9)、42b 半田 (浅野守彦 2116, 2007-11-10)、52 名古屋南西部 (芹沢 83580, 2008-10-12)、58b 弥富 (畑佐武司 1528, 2000-10-10) など確認されているが、近況は十分調査されていない。51 名古屋南東部 (加福町, 高木順夫 5628, 1997-11-1) にもあったが絶滅した。

要配慮地区図



【国内の分布】

北海道東部、本州 (関東地方以西の太平洋側)、四国、九州に生育する。

【世界の分布】

アジア、ヨーロッパ、アフリカ北部に広く分布する。

【生育地の環境／生態的特性】

内湾の塩湿地や河口部の河川敷などに生育するほか、埋立地の水路などに生育していることもある。

【現在の生育状況／減少の要因】

ある場所では群生していることが多く、花時には美しい。三河湾側では以前はかなり多かったが、攪乱が少なくなってヨシが著しく繁茂し、あまり見かけなくなった。2024 年秋に矢作川河口部を見たときには、くまなく調査したわけではないけれども、全く見当たらなかった。伊勢湾側ではもともとあまり多くなかった。名古屋南東部では、生育地が廃棄物最終処分場となり絶滅した。名古屋南西部では庄内川河口部に生育しているが、2019 年秋に左岸側を調査した人の話では、数個体しか確認できなかったという。

【保全上の留意点】

本種の生育地である内湾部や河口部は開発圧力が極めて高く、その一方で開発されなければヨシが繁茂して自然環境が単純化する。注意して自然環境を保全する必要がある。塩湿地性植物は全体的に目立たないものが多いが、その中で本種はハマボウと共に花が美しく、象徴としての意味も大きい。

【特記事項】

ハマシオンとも呼ばれる。

【関連文献】

保草本 I p.80, 平新版 5 p.326, SOS 新版 p.154,156.

(執筆 芹沢俊介)

シラネワラビ *Dryopteris expansa* (C.Presl) Fraser-Jenk. et Jermy

【評価理由】

個体数階級 2、集団数階級 3、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有度階級 1、総点 11。温帯性のシダ植物で、近年減少傾向が著しい。

【形態】

夏緑性のシダ植物。根茎は斜上する。葉は束生し、葉柄は長さ 15～45cm、基部に褐色で中央部が暗色の鱗片を密生するが、上部では鱗片は小さく、ややまばらになる。葉身はやや五角形状の広卵形、長さ 25～45cm、幅 20～35cm、3 回羽状深～全裂、羽片は 5～7 対で、最下羽片の下側は上側に比べ幅広くなり、小羽片の裂片は更に浅～深裂する。胞子のう群は裂片の中肋と辺縁の中間につき、包膜は円腎形、直径 1mm 程度である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：1 富山（芹沢 82908, 2008-6-7）、2 豊根（芹沢 102196, 2023-7-17）、6 設楽西部（小林 52665, 1994-7-16）、11 作手（小林 53485, 1994-9-4）。西：5 稲武（芹沢 84357, 2009-7-4）。

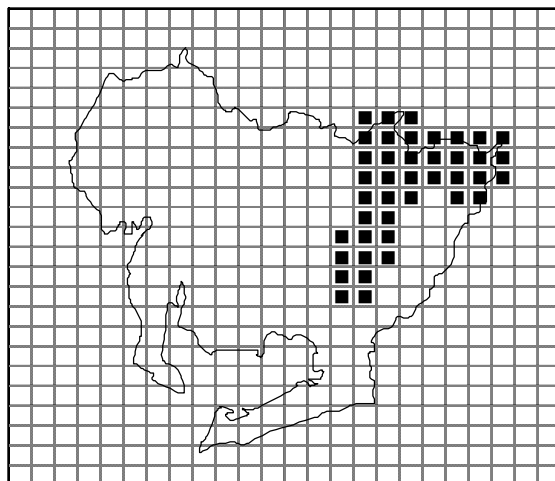
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

北半球の温帯に広く分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の林内に生育する。自然林だけでなく、二次林や造林地にも生育している。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

県内の分布域は三河山地のやや標高の高い場所に限られるが、そこでは以前はそれほど少ないものではなかった。しかし最近になって、見る機会がかなり減少している。生育環境自体は変化していないので、ニホンジカによる食害が減少の原因と思われる。

【保全上の留意点】

ニホンジカの個体数調整が必要と思われる。

【関連文献】

平シダ p.192-193, 学シダ II p.369.

(執筆者 芹沢俊介)

ヤノネシダ *Lepidomicrosorium buergerianum* (Miq.) Ching et K.H.Shing

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 2、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 11。暖帯域の沢沿いの岩上や樹幹に着生するシダ植物で、最近見る機会が減少している。

【形態】

常緑性のシダ植物。根茎は長く這い、密に鱗片をつける。葉は 1~4cm 間隔で出て、やや 2 形性、胞子のう群をつけない、またはあまりつけない葉は葉柄が長さ 1cm 程度のもから 10cm 近くになるものまで変異が著しく、短いものは全体に広い翼があるが長いものは上部にのみ狭い翼があり、葉身は三角状卵形~三角状長卵形、長さ 3.5~10cm、幅 2~5cm、先端は鋭頭、基部は広い楔形~心形で、しばしば両側に不明瞭な突起がある。胞子のう群をよくつける葉は葉身がより長く、また細い。胞子のう群は葉裏全面に散在し、円形、直径 1~1.5mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：8 鳳来北東部（村松 26325, 2012-3-28）、10 鳳来北西部（小林 49790, 1993-12-12）、12 新城（芹沢 64239, 1992-10-16）、14 蒲郡（井上美保子 960, 1994-2-20）。西：28 額田（小林 55088, 1994-11-13）、29 岡崎北部（芹沢 47480, 1987-10-18）、30 岡崎南部（小林 56081, 1995-4-1）。

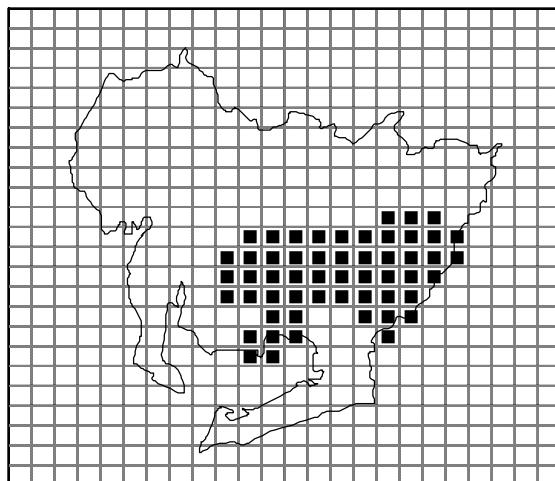
【国内の分布】

本州（関東地方以西）、四国、九州。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

暖帯域の沢沿いの岩上や樹幹に着生し、根茎は基物上を長く這って、かなり高い場所まで登ることがある。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

以前は時折見かけた種類であるが、最近見る機会が減少している。減少の原因はよくわからない。

【保全上の留意点】

生育地の林を保全することが必要である。

関連文献】

平シダ p.268-269, 学シダ II p.465.

(執筆者 芹沢俊介)

ヒナノウスツボ *Scrophularia duplicatoserrata* (Miq.) Makino

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 2、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 11。三河山地では以前は時折見かけた種類だが、近年見る機会が減少している。

【形態】

夏緑性の多年生草本。地下茎は短く横に這うか斜上する。茎は1~2本出て、高さ30~100cm、4稜がある。葉は対生し、下部のものは長さ3~5cmの柄があり、葉身は卵状長楕円形、長さ6~12cm、幅2.5~5.5cm、先端は鋭頭、辺縁には重鋸歯がある。上部の葉は柄が短く、葉身も小さくなる。花期は7~9月、花は茎の上部の長さ7~15cmの円錐花序にややまばらにつくが、茎の中下部の葉腋から花序を出すこともある。花柄は細くて長く、花冠はつぼ形、長さ6~9mm、暗赤紫色、先は唇形になり、上唇は2裂、下唇は3裂する。果実は球形、長さ6~7mmである。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：1 富山（芹沢 67326, 1993-9-2）、2 豊根（小林 38685, 1992-8-10）、3 東栄（小林 53359, 1994-8-27）、8 鳳来北東部（小林 53392, 1994-8-27）、12 新城（小林 39590, 1992-9-20）、13 豊川（小林 39547, 1992-9-20）。西：5 稲武（小林 38049, 1992-6-28）、19 旭（小林 38578, 1992-8-5）、25 豊田北西部（畑佐武司 4976, 2002-9-3）。

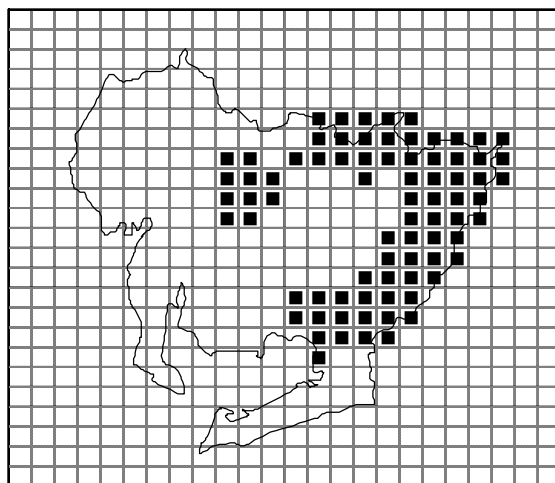
【国内の分布】

本州（東北地方南部以西）、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の沢沿いの林内に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

1990年代前半には時折見かけたが、個体数はもともとそれほど多くなかった。最近になって「稀少ではないか」と指摘されて、「そう言われれば最近見ていない」と気付いた種類である。ただし豊田北西部には現存するらしい。ニホンジカによる林床植物の食害が減少の要因かもしれないが、食害が激化する前から減少していた可能性もある。以前生育していた場所の近況を個別に確認しているわけではないので、今回は個体数階級 3、集団数階級 2として評価したが、実際にはもっと危機的かもしれない。

【保全上の留意点】

現存する集団については、個別的な保全が必要と思われる。

【関連文献】

保草本 I p.154, 平新版 5 p.94.

(執筆 芹沢俊介)

クチナシグサ *Monochasma sheareri* (S.Moore) Maxim.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 2、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 1、総点 11。愛知県では以前はあちこちで見かけた種類だが、近年見る機会が著しく減少している。

【形態】

半寄生の越年生草本。茎は基部で分枝し、放射状に広がって立ち上がり、長さ 15～45cm になる。葉は対生し、茎の基部のものは小さいが次第に大きくなり、線形で長さ 2～3cm、幅 1～4mm になる。花期は 4～5 月、花は茎上部の葉腋に 1 個ずつつき、長さ 0.3～1cm の柄があり、がくは基部に 2 枚の苞葉があり、花時には長さ 1～1.5cm だが花後さらに伸長する。花冠は筒状で先は唇形になり、淡紅紫色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：8 鳳来北東部（小林 56409, 1995-4-29）、12 新城（小林 63586, 1998-4-22）、17 田原東部（小林 71616, 2001-5-3）、18 田原西部（小林 42599, 1993-5-9）。西：19 旭（小林 59370, 1996-5-12）、22 小原（日比野修 2079, 1994-5-5）、23 藤岡（塚本威彦 488, 1993-4-20）、24 豊田北東部（畑佐武司 1740, 2001-5-2）、25 豊田北西部（磯貝彰宏 1150, 1984-5-17）、28 額田（福岡義洋 309, 1990-4-17）。尾：37a 瀬戸（芹沢 75469, 1999-5-5）、45 犬山（芹沢 51241, 1989-4-26）、47 小牧（日比野修 4747, 1999-5-11）、48 春日井（山田果与乃 1665, 2011-4-30）。15 豊橋北部にもあると聞いたが、未確認である。

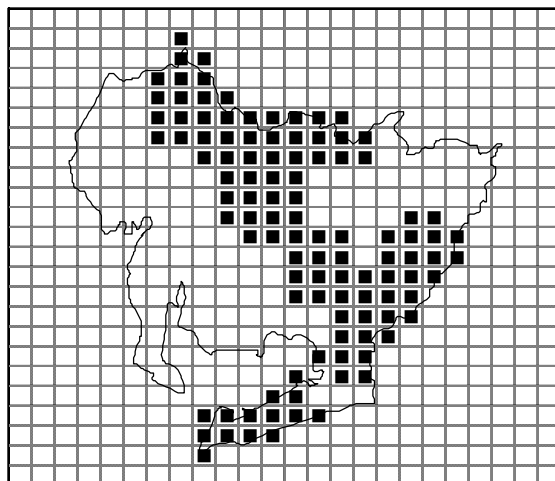
【国内の分布】

本州（関東地方以西）、四国、九州。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸中部。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

低山地～丘陵地の、林縁の草地や明るい落葉広葉樹林内に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○	○		
草・岩	○	○		
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

以前はあちこちで見かけた種類であるが、近年見る機会が著しく減少している。個体数階級と集団数階級は見込み値である。里山の森林化や林縁における大型草本の繁茂が原因で減少していると思われるが、はっきりしない。

【保全上の留意点】

現在生育している場所については草刈りなどの草地保全策を検討する必要があるが、現実問題としては困難かもしれない。

【関連文献】

保草本 I p.129, 平新版 5 p.155.

(執筆 芹沢俊介)

ムサシアブミ *Arisaema ringens* (Thunb.) Schott

【評価理由】

愛知県では最近確認された種類で、そのまま評価すれば個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 3、固有性階級 2、総点 15 で絶滅危惧 I B 類になるが、移入の可能性も皆無ではなく、更に情報の蓄積が必要である。

【形態】

多年生草本。地下茎は扁球形、上部から多くの根を出す。葉身のある葉は 2 個、第 1 葉の葉柄は長さ 25~40cm で、下方の 10~15cm は偽茎となる。葉身は無柄の 3 小葉からなり、頂小葉は菱状楕円形、花時には長さ 10-20cm、幅 5~9cm だが花後より大きくなり、先端は細く長く伸び、辺縁は全縁、表面は深緑色で光沢があり、裏面は白色を帯びる。第 2 葉は第 1 葉と同大、またはやや小さい。花期は 3-4 月、仏炎苞は葉と同時に開き、葉より低い位置につき、筒部は長さ 4~6cm、口辺は広く開出、舷部は中央部が前方に著しく膨らみ、内面は暗紫色、外面は白条が目立つ。花序は肉穂状、偽雌雄異株、花序付属体は長さ 4~6cm、棒状で前屈する。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾：37a 瀬戸 (芹沢 104372, 2024-9-18)。
52 名古屋南東部 (長谷川 25, 2017-4-11, NBC) で採集された標本もあるが、これは更に移入の可能性が高い。

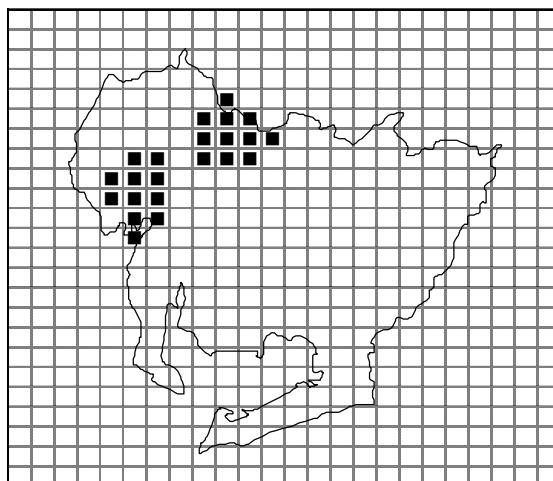
【国内の分布】

本州西部、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島南部、台湾、中国大陸。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

やや湿った林床。四国以南では海岸林の林内に多く見られる。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

瀬戸市では、ざっと見た範囲では二次林内に 3 株生育していた。名古屋市では人家近くの林内に 10~20 株生育しているという。

【保全上の留意点】

自生ならば、生育地の林を保全する必要がある。

【特記事項】

本種は、形態が特異でしばしば栽培されること、逸出しやすい植物で名古屋市の生育地の近くには東山植物園もあるので、今まで評価対象外と判断してきた。しかし 2024 年になって瀬戸市でも発見され、もともと人里近くの藪山にも生育している種であることから、名古屋市のものも含めて自生の可能性が出てきた。しかしさらに確認が必要なので、今回は情報不足と判定する。邑田ほか (2018) は、本種の分布域を愛知県、福井県以西としている。

用文献】

邑田 仁・大野順一・小林禎樹・東馬哲雄, 2018. 日本産テンナンショウ属図鑑. 361pp. 北隆館, 東京.

関連文献】

保草本Ⅲp.200, 平新版 1 p.97.

(執筆者 芹沢俊介)

オオハンゲ *Pinellia tripartita* (Blume) Schott

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 2、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 2、総点 12。現状をそのまま評価すれば絶滅危惧Ⅱ類になるが、逸出の可能性もあり、更に情報の蓄積が必要である。

【形態】

多年生草本。球茎は直径 2～3.5cm になる。葉は 1～3 枚、葉柄は長さ 18～40cm で、むかごはつけない。葉身は 3 深裂し、中央裂片は楕円形、長さ 10～20cm、幅 6～10cm、全縁、先端は鋭尖頭になる。花期は長く 5～9 月、花序柄は長さ 20～35cm、仏焰苞は葉とほぼ同高で、愛知県のものは緑色だが淡紫色のこともあり、筒部は長さ 3.5～5cm、舷部は長楕円形で長さ 3～4cm、花序付属体は苞の外に伸びて立ち、長さ 15～20cm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：9 鳳来南部 (中西普佐子 4548, 2018-6-19)、12 新城 (芹沢 95264, 2019-6-1)。
西：35 西尾北部 (芹沢 103722, 2024-5-11)。
尾：37a 瀬戸 (塚本威彦 196, 1992-7-6)、
50 名古屋北東部 (高木順夫 21449, 2012-10-13)、51 名古屋南東部 (芹沢 95193, 2019-5-18) で確認されている。

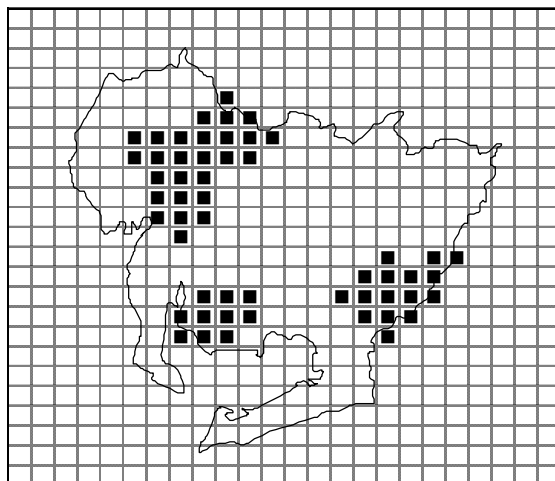
【国内の分布】

本州 (中部以西)、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の林内に生育する。ただし愛知県の生育地は、丘陵地二次林の林内や林縁、低山地の沢沿いの造林地内 (新城) である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○		
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

瀬戸では最近確認されておらず、名古屋北東部は状況不明である。他の場所では比較的最近確認されているが、どこも個体数は少なかった。

【保全上の留意点】

自生ならば、生育地の林を保全する必要がある。

【特記事項】

本種は愛知県内では最初瀬戸市定光寺境内で発見されたもので、その後名古屋市や新城市でも確認されたが、隣接する三重県ではそれなりに自然度の高い場所に生育しているのに対し愛知県では生育地が都市公園であったり、山地でも林道わきで伐採枝を捨てられそうな場所であったりするため、今まで移入と判断してきた。しかし 2024 年になって西尾市でも確認され、ここも道路わきではあったが、自生の可能性もあるという判断に傾きつつある。しかしさらに確認が必要なので、今回は情報不足と判定する。

【関連文献】

保草本Ⅲp.196, 平新版 1 p.109.

(執筆者 芹沢俊介)

コツブヌマハリイ *Eleocharis parvinux* Ohwi

【評価理由】

藤井（2022）によって愛知県での生育が初めて記録された種類であるが、生育状況も標本も確認できていないので、今回は情報不足として掲載しておく。藤井の報告をもとに判断すれば、個体数階級 4、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 3、固有性階級 2、総点 16、絶滅危惧 I A 類になると思われる。

【形態】

多年生草本。根茎は長く匍匐する。茎は根茎の先端からややまとまって出て、高さ 30～60cm、軟質で平滑、基部の鞘は赤褐色である。花期は 6～10 月、小穂は茎の先端に 1 個つき、披針形、長さ 1～1.5cm である。そう果は倒卵形で長さ 1～1.2mm、黄褐色、柱頭は 2 岐、刺針状花被片は 4 個で長さはそう果の 2～3 倍あり、下向きにざらつく。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾：49d 清須。標本（藤井伸二 17793, 2018-5-26）は KYO,TNS にあるというがまだ確認していない。

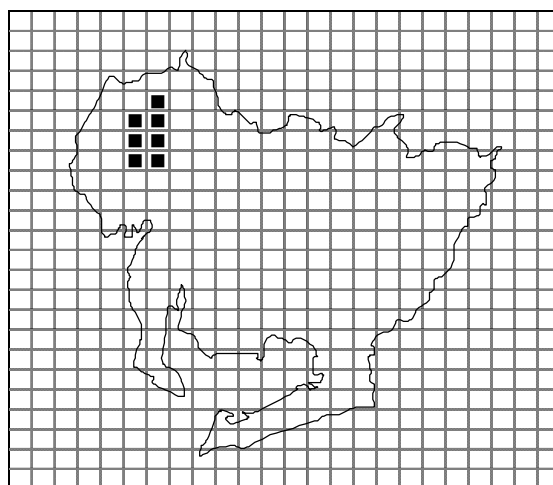
【国内の分布】

本州（関東～近畿）、四国（高知県）、九州（熊本県）。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

藤井（2022）によれば、五条川左岸河川敷の、比較的最近（おそらく数年以内）に形成されたものと考えられる直径 3m ほどの浅いわんどの縁に生育していたという。他の場所でも、攪乱によって生じた湿地環境に生育することが多いらしい。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地			○	
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

藤井（2022）には、「おおよそ 50cm 四方の範囲に束生しており、約 50 の花序シュートを形成していた。……群落の発見時には旺盛に開花・結実していたが、その後 2020 年 6 月 9 日の調査時にはヨシ群落の勢力拡大によって開水域がほぼ消失してコツブヌマハリイは消滅寸前であった。」と記述されている。

【保全上の留意点】

攪乱環境に依存する種で自然状態でも長期には存続しないようなので、個別的な保全は困難かもしれない。河川敷等の低湿地環境を全体として保全することが重要と思われる。

【引用文献】

藤井伸二, 2022. 愛知県と岐阜県からコツブヌマハリイ（カヤツリグサ科）を記録する. 植物地理・分類研究 170: 171-173.

【関連文献】

保草本Ⅲp.227, 平新版 1 p.344.

星野卓二・正木智美, 2011. 日本カヤツリグサ科植物図譜 p.636. 平凡社, 東京.

（執筆者 芹沢俊介）

キリシマギンリョウソウ *Monotropastrum kirishimense* Suetsugu

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 2、総点 14。現在のところ県内産の確実な標本は1点しかなく、現状をそのまま評価すれば絶滅危惧II類になる。しかし最近記載された種類 (Suetsugu et al. 2023) で情報の蓄積が不十分であり、他の場所にあるという話も聞くので、さしあたり情報不足と判断する。

【形態】

初夏に開花する多年生の菌従属栄養植物。ギンリョウソウの子房が赤紫色になる品種 (ベニバナギンリョウソウ) に似ているが、地上部は全体に小さくて丸味を帯び、がく片も色づく (ベニバナギンリョウソウではがく片は無色)。地下部はギンリョウソウでは明瞭な根が確認できるが、本種は根が不明で、菌糸のようなものが見えるだけである。開花期は愛知県ではギンリョウソウより 1 か月程度遅い。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：7 設楽東部 (中西普佐子 5607, 2024-6-23)。この産地は天野保幸氏が発見されたものである。

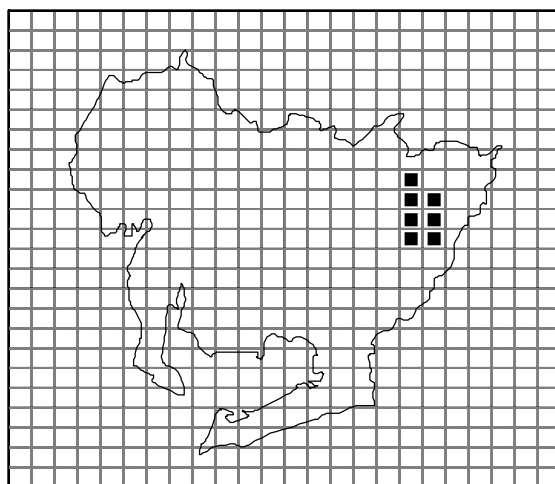
【国内の分布】

本州 (静岡県、岐阜県、愛知県、大阪府)、九州 (宮崎県、鹿児島県)。

【世界の分布】

現在のところ日本固有である。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

腐植土のたまった林床に生育する。設楽町の生育地はよく育った沢沿いの造林地である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

小群落が点在しており、個体数は数えにくい、10 より多く 100 より少ないという。

【保全上の留意点】

何はともあれ、情報の蓄積が必要である。設楽東部以外でも何カ所かに生育しているようなので、早急に現況を確認したい。

【特記事項】

本種 の 原稿 は 瀧 崎 が 執筆 し、 芹 沢 が 加 筆 修正 し た。

【引用文献】

Suetsugu, K., S.K.Hirota, T.-C.Hsu, S.Kurogi, A.Inuma and Y.suyama, 2023. *Monotropastrum kirishimense* (Ericaceae), a new mycoheterotrophic plant from Japan based on multifacted evidence. J. Plant Res. 136: 3-18.

【関連文献】

現在のところ関連する一般的な文献はない。

(執筆者 瀧崎吉伸・芹沢俊介)

イヌカタヒバ *Selaginella moellendorffii* Hieron.

【除外理由】

愛知県では人里周辺でしばしば見かける植物だが、すべて栽培品からの逸出で、評価の対象にならない。

【形態】

常緑性の多年生草本。匍匐茎は基物の上を這う。地上茎は長さ 10～20cm の柄状の部分があり、葉身状の部分は卵形～三角状広卵形、長さ 15～22cm、幅 8～20cm、3～4 回羽状に分岐し、先端は鋭尖頭になる。羽片状の側枝は 4～7 対である。枝上の葉は 2 形性、各 2 列につき、背葉は卵形、長さ 0.7～1.3mm、先端は芒状、辺縁は白色の膜状になり、辺毛がある。腹葉は卵形～長卵形、長さ 1.2～3mm、先端は前方に曲がって鋭尖頭、辺縁は狭い白膜部になる。胞子のう穂は小枝の先端につき、四角柱状、長さ 0.5～1cm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：8 鳳来北東部（芹沢 87807, 2012-9-1）、9 鳳来南部（芹沢 98832, 2021-8-25）、10 鳳来北西部（芹沢 98911, 2021-9-4）、15 豊橋北部（芹沢 82629, 2007-10-7）。西：25 豊田北西部（山崎玲子 1345, 1996-4-2）、27 みよし（芹沢 89737, 2014-10-5）、28 額田（芹沢 104478, 2024-10-5）。尾：37b 尾張旭（芹沢 88184, 2012-10-27）、38b 日進（村松 25540, 2010-11-20）、39b 豊明（浅野守彦 1452, 2000-8-11）、45 犬山（芹沢 85344, 2009-11-7）、49c 名古屋（鈴木幸子 687, 1994-10-26）、50 名古屋北東部（太田由美子 167, 1993-8-22）、52 名古屋西部（高木順夫 23899, 2018-10-13）、54 一宮西部（渡辺幸子 4877, 2001-9-18）で採集された標本がある。これ以外にも生育している区画があると思われる。

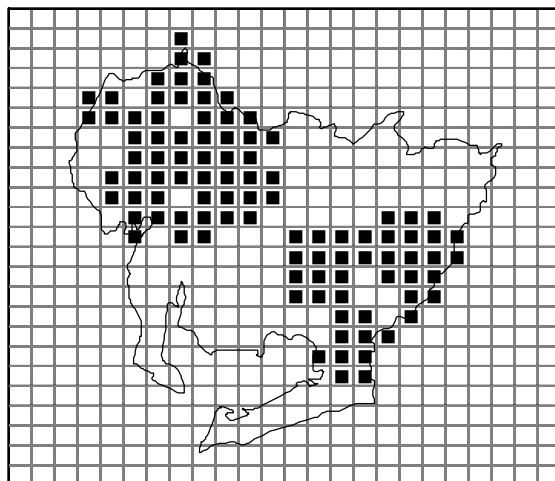
【国内の分布】

自生のものは、琉球（八重山諸島）に分布しているだけである。

【世界の分布】

日本南端・フィリピンからインドシナにかけて分布している。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

自生地では沢沿いの湿った岩上に生育しているが、逸出したものは地上性またはそれに近いことが多い

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩			○	
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

愛知県では人家の周辺に生育している。やや山中に生育している場合でも、近くには建物等がある。

【保全上の留意点】

愛知県のものはすべて栽培品の逸出であり、保全の対象にならない。

【特記事項】

カタヒバに似ているが、地上茎の葉身状部分はあまり伸びず、側枝は著しく重なり合い、葉縁が白色になる。2020 年版には掲載されていないが、収録もれであった。

【関連文献】

平シダ p.52, 学シダ I p.278.

(執筆者 芹沢俊介)

ハガクレカナワラビ *Arachniodes yasui-inoue* Sa.Kurata

【除外理由】

愛知県では名古屋市中で 1 回採集されただけの植物だが、採集された場所から判断しておそらく樹木苗等について移入されたものと思われ、評価の対象にならない。

【形態】

常緑性の多年生草本。根茎は短く匍匐する。葉は少数が接近して出て、葉柄は長さ 40～70cm、密に披針形で黒褐色の鱗片をつける。葉身は卵形～長橢円状卵形、長さ 30～50cm、幅 15～25cm、2 回羽状全裂、先端は急に狭くなる。側羽片は 4～6 対、最下羽片は長さ 14～20cm で 7～12mm の柄があり、小羽片は 12～15 対、短い柄があり、基部前側は耳状、下側第一小羽片は更に羽状に切れ込み、次のものより大きい、著しく長いというほどではない。胞子のう群はやや中肋寄りにつき、包膜は円腎形である。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾：52 名古屋南西部（熱田区、高木順夫 7705, 1999-9-23）で採集されたことがある。標本は葉身長約 40cm である。

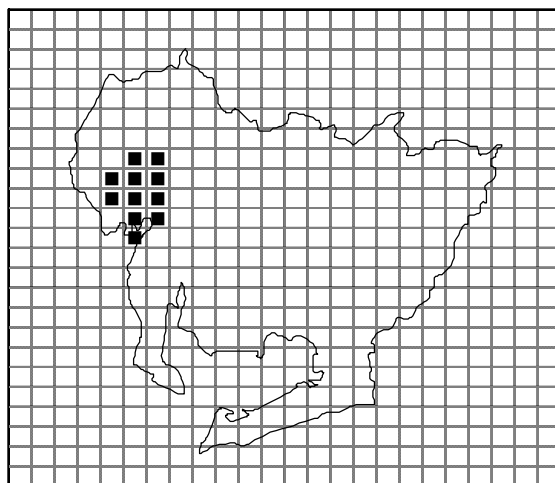
【国内の分布】

本州（紀伊半島、山口県）、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

自生地では沢からやや離れた照葉樹林内に生育していることが多い。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

愛知県では 1 回採集されただけで、生育状況も不明である。現在まだ生育しているかどうかははっきりしない。

【保全上の留意点】

本来の自生ではないと思われるので特に配慮する必要はないが、愛知県での記録は少ないので、見かけたら標本を作成しておいてほしい。

【特記事項】

オニカナワラビ *A. chinensis* (Rosenst.) Ching に似ているが、葉質がやや薄く、葉縁の鋸歯は先端が著しく芒状になる。2020 年版には掲載されていないが、収録もれであった。

【関連文献】

平シダ p.181, 学シダⅡ p.394, 環境省 p.382.

(執筆 芹沢俊介)